

教育部補助推動臺灣文史藝術國際交流計畫

類二：選送臺灣文史藝術研究生短期出國研修

〈日據時期寫實主義文學論述與日本近代文藝評論發展的關係〉

期末成果報告書

計畫期程：2009年4月1日～2010年9月30日

指導暨補助單位：教育部

執行單位：國立成功大學台灣文學系

計畫主持人：游勝冠

補助選送學生：許倍榕

教育部補助推動臺灣文史藝術國際交流計畫

類二：選送臺灣文史藝術研究生短期出國研修

〈日據時期寫實主義文學論述與日本近代文藝評論發展的關係〉

期末成果報告書

計畫期程：2009年4月1日～2010年9月30日

指導暨補助單位：教育部

執行單位：國立成功大學台灣文學系

計畫主持人：游勝冠

補助選送學生：許倍榕

目錄

修課名稱暨修課大綱 3

相關成績證明

其他研修活動 14

研修期間之研究發表 17

研修期間論文 41

修課名稱暨教學大綱

※留學期間研修課程：

一、2009 年度（2009 年 4 月～2010 年 3 月）

課程名稱	授課老師	備註
アジア言語文化論 （亞細亞言語文化論）	松永正義	
日本語選択・文法Ⅱ （日語選修：文法 2）	庵 功雄	
日本語選択・上級読解Ⅰ （日語選修：上級讀解 1）	庵 功雄	
演習 （專題討論）	松永正義	演習：指導教授之專題討論課
演習（夏學期） （專題討論）	安田敏朗	安田敏朗教授為留學期間之副指導教授
演習（冬學期） （專題討論）	安田敏朗	
アジア言語文化論（集中講義）	松永正義	旁聽

二、2010 年度（2010 年 4 月～2010 年 9 月）

課程名稱	授課老師	備註
アジア言語文化論 （亞細亞言語文化論）	松永正義	
演習 （專題討論）	松永正義	

※教學大綱

一、2009年度（2009年4月～2010年3月）

科目名 Course Name	演習				教員名 Instructor	松永 正義			
学期 Semester	夏期 (S)	曜日 Day	月 (Mon)	時限 Period	5 限	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	言語社会研究科

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2009-02-02

- 4月27日 蕭阿勤『回帰現実』第4章
- 5月02日 遠足（9時国立駅南口集合）
- 11日 蕭阿勤『回帰現実』第5章
- 18日 蕭阿勤『回帰現実』第6章
- 25日 伊藤整『文学入門』
第一章 物語りの成立とその形式
第二章 悲劇と喜劇
- 6月01日 伊藤整『文学入門』
第三章 近代社会と心理小説
第四章 日本の近代社会と小説
- 08日 伊藤整『文学入門』
第五章 芸術至上主義と私小説
第六章 近代人のエゴと小説形式
- 15日 伊藤整『文学入門』
第七章 論理と調和の文学
第八章 下降認識と上昇認識
- 22日 伊藤整『文学入門』
第九章 現代社会と人間
第十章 芸術の本質
- 29日 斉藤希史『漢文脈と近代日本』序章～第二章
- 7月06日 斉藤希史『漢文脈と近代日本』第三章～終章
- 7月11日～13日 合宿

[学部・学年の指定 (Who Should Attend)] 最終更新日：2009-02-02

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。

ない。
[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)] 最終更新日：2009-02-02 毎回レポートを分担してもらい、それに基づいて討論を行う。
[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)] 最終更新日：2009-02-02 概要に同じ。
[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2009-02-02 蕭阿勤『回帰現実』中央研究院社会学研究所、2008.6 伊藤整『文学入門』講談社文藝文庫、2004.12 斉藤希史『漢文脈と近代日本』NHK ブックス、2007.2
[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)] 最終更新日：2009-02-02 ない。
[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)] 最終更新日：2009-02-02 出席点による。
[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)] 最終更新日：2009-02-02 一般のルールに従う。
[受講生に対するメッセージ (Message to Students)] 最終更新日：2009-02-02 はじめに読むものは中国語なので、中国語が読めることが条件となる。
[その他 (Additional Information)] 最終更新日：2009-02-02 ない。

科目名 Course Name	アジア言語文化論（中国）I				教員名 Instructor	松永 正義			
学期 Semester	夏期 (S)	曜日 Day	月 (Mon)	時限 Period	4 限	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	言語社会研究科

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2009-02-02
一、①1920年代の新旧文学論争、②30年代の郷土文学論争、③40年代の皇民か文学、④戦後の台湾文学論争、⑤70年代の郷土文学論争の5つのトピックをとりあげる。①では日本の大正デモクラシーと社会主義運動の始まり、中国の五四運動などとの比較の中で、新旧文学論争について考える。②では日本および中国のプロレタリア文学

運動と文芸大衆化論との比較の中で、郷土文学論争について考える。③では皇民化運動と日本語の問題を考え、また皇民文学とは違う位置にあった中国語作家、呉濁流、陳千武などについて考える。④では台湾における脱殖民化の課題について考えることで、台湾の戦後文学について考える。⑤では70年代の意味をとらえなおし、80年代における構造変化との関わりの中で郷土文学論争について考える。

二、日本近代文学：①日本近代文学形成、②言文一致（近代語形成、国語形成）③明治二〇、三〇年代の文学、④明治から大正へ。

[学部・学年の指定 (Who Should Attend)] 最終更新日：2009-02-02

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。
ない。

[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)] 最終更新日：2009-02-02

台湾文学の歴史の概要を、特に日本文学と中国文学との比較の中で考える。

[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)] 最終更新日：2009-02-02

講義形式で行う。講義の次第は概要のとおり。

[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2009-02-02

適宜プリントを配布する。

[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)] 最終更新日：2009-02-02

ない。

[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)] 最終更新日：2009-02-02

最後にレポートを提出してもらい、出席を加味しながら評価する。

[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)] 最終更新日：2009-02-02

一般のルールに従う。

[受講生に対するメッセージ (Message to Students)] 最終更新日：2009-02-02

ない。

[その他 (Additional Information)] 最終更新日：2009-02-02

ない。

Course Name					Instructor				
学期 Semester	通年 (Y)	曜日 Day	木 (Thr)	時限 Period	2 限	単位 Credit	4	科目区分 Course Category	言語社会研究科

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日 : 2009-01-08

夏学期は、「日本人」になることをテーマとして各種論文、学術書を読んでいきたいと考えています。テキストは初回に示します。

冬学期は、個人研究の報告をしてもらいます。

夏学期 :

- 4月16日 Leo T.S Ching 『Becoming Japanese』
23日 趙景達 「15年戦争下の朝鮮民衆」
30日 休講
5月07日 黄馨儀 (研究発表)
14日 近藤健一郎編 『沖縄. 問いをたてる2 方言札』
21日 近藤健一郎 「近代沖縄における方言札の出現」
28日 休講
6月04日 テッサ・モーリス＝鈴木 『辺境から眺める アイヌが経験する近代』
11日 駒込武 『植民帝国日本の文化統合』
18日 西川長夫・松宮秀治 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』
25日 ステファノ (研究発表)
7月02日 陳培豊 『同化の同床異夢』

冬学期 :

- 10月01日 牧原憲夫 『客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識』
10月08日 牧原憲夫 『客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識』
10月15日 休講
10月22日 個人報告 高橋/コメント 蔡
10月29日 個人報告 林/コメント 大橋
11月05日 休講
11月12日 個人報告 白/コメント ノ
11月19日 個人報告 黄(耀)/コメント 許・呂
11月26日 趙 『植民地朝鮮/帝国日本の文化連環』 序章+第1部 担当未定
12月03日 同上 第2部 担当未定
12月10日 同上 第3部+終章 担当未定
12月17日 個人報告 ヴァレンティーナ/コメント 源

01月07日 個人報告 蔡／コメント 林
 01月14日 崎山さん講演会 午後3時から。懇親会

[学部・学年の指定 (Who Should Attend)]

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。

[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)]

[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)]

[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)]

[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)]

[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)] 最終更新日：2009-01-08

平常点

[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)] 最終更新日：2009-01-08

報告の出来。

[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]

[その他 (Additional Information)]

科目名 Course Name	アジア言語文化論（中国語圏）III					教員名 Instructor	松永 正義		
学期 Semester	冬期 (W)	曜日 Day	特別講義	時限 Period	集中講義	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	言語社会研究科

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2009-09-17

1

講義内容 この講義は、現在言語社会研究科で進行中の、東アジアの各教育機関と提携して教育体制を構築していこうとするプログラムの一環として行われるもので、李衣雲氏を招いて共同で講義を行う。

李衣雲氏は政治大学台湾史研究所の助理教授。台湾大学で修士まで社会学を研究され、その後日本に留学、東京大学で博士を取得された。台湾の社会文化史を専門とされている。

講義では漫画、デパートなどの大衆的な文化を例としつつ、日本と台湾における大衆文

化史、大衆文化論を考え、その中で日本と台湾におけるそのあり方を比較、検討しようとする。

講義形態は、松永と李衣雲氏がそれぞれに講義を行うか、李衣雲氏の講義に松永がコメント、問題提起をしていくようなかたちで行うか、まだ未定であるが、決定次第補足したい。

講義の言語は基本的に日本語とする予定である。

2

講義内容 この講義は、現在言語社会研究科で進行中の、東アジアの各教育機関と提携して教育体制を構築していこうとするプログラムの一環として行われるもので、李衣雲氏を招いて共同で講義を行う。

李衣雲氏は政治大学台湾史研究所の助理教授。台湾大学で修士まで社会学を研究され、その後日本に留学、東京大学で博士を取得された。台湾の社会文化史を専門とされている。

講義のテーマは「近代日本及び台湾の大衆文化史」。漫画、デパートなどの大衆的な文化を例としつつ、日本と台湾における大衆文化史、大衆文化論を考え、その中で日本と台湾におけるそのあり方を比較、検討しようとする。

講義形態は、松永と李衣雲氏がそれぞれに講義を行うか、李衣雲氏の講義に松永がコメント、問題提起をしていくようなかたちで行うか、まだ未定であるが、決定次第補足したい。

講義の言語は基本的に日本語とする予定である。

[学部・学年の指定 (Who Should Attend)]

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。

[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)]

[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)]

[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)]

[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)]

[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)]

[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)]

[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]

[その他 (Additional Information)]

科目名 Course Name	日本語選択・文法Ⅱ				教員名 Instructor	庵 功雄(IORI Isao)			
学期 Semester (S)	夏期	曜日 Day	水 (Wed)	時限 Period	1 限	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	日本語・基礎・日本語

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2009-01-16 設問に答える形で授業を進め、上級前半レベルの文法能力を身につけることを目指す。日本語能力試験に関する練習も行う予定である。									
[学部・学年の指定 (Who Should Attend)] ※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。									
[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)]									
[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)]									
[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2009-01-16 テキストは用いず、プリントを配布する。									
[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)]									
[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)]									
[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)]									
[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]									
[その他 (Additional Information)]									

科目名 Course Name	日本語選択・上級読解Ⅰ				教員名 Instructor	庵 功雄(IORI Isao)			
学期 Semester (S)	夏期	曜日 Day	水 (Wed)	時限 Period	2 限	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	日本語・基礎・日本語

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2009-01-16 上級前半レベルの文章を読み、文章の読み方や文法について学ぶ。また、時事問題についても触れる予定である。									
[学部・学年の指定 (Who Should Attend)]									

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。

[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)]

[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)]

[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2009-01-16

テキストは用いず、プリントを配布する。

[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)]

[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)]

[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)]

[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]

[その他 (Additional Information)]

二、2010年度（2010年4月～2010年9月）

科目名 Course Name	アジア言語文化論（中国）I				教員名 Instructor	松永 正義			
学期 Semester (S)	夏期	曜日 Day	月 (Mon)	時限 Period	4 限	単位 Credit	2	科目区分 Course Category	言語社会研究科

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2010-01-24

一、台湾文学の諸問題について講義を行う。

二、日本のプロレタリア文学：①大正デモクラシーと大正文学、②昭和文学の前提、③昭和文学（昭和文学関係年代：1909～1938）

[学部・学年の指定 (Who Should Attend)] 最終更新日：2010-01-24

※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。

なし

[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)] 最終更新日：2010-01-24

台湾文学のアウトラインを理解することを目的とする。

[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)]

[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2010-01-24 必要に応じてプリントを配布する。
[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)] 最終更新日：2010-01-24 中国語の能力は要求しない。
[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)] 最終更新日：2010-01-24 平常点及び期末のレポートによる。
[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)] 最終更新日：2010-01-24 平常点50%、レポート50%
[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]
[その他 (Additional Information)]

科目名 Course 演習 Name	教員名 松永 正義 Instructor			
学期 夏期 Semester (S)	曜日 月 Day (Mon)	時限 5 Period 限	単位 2 Credit	科目区分 Course 言語社会研究科 Category

[授業概要 (Course Overview)] 最終更新日：2010-01-24 台湾に関する日本語の研究論文を読む。 あらかじめ分担を決め、分担箇所についてレポートしてもらい、それに基づいて討論する。
[学部・学年の指定 (Who Should Attend)] 最終更新日：2010-01-24 ※履修ルール上の指定内容については必ずルールブックおよびガイドブックの該当箇所を確認して下さい。 なし
[授業の目的・到達目標と方法 (Goals & Methodology)] 最終更新日：2010-01-24 詳細については最初の時間にガイダンスを行う。
[授業の内容・計画 (Topics / Schedule)] 最終更新日：2010-01-24 詳細については最初の時間にガイダンスを行う。
[テキスト・参考文献 (Textbooks / References)] 最終更新日：2010-01-24 詳細については最初の時間にガイダンスを行い、決定する。

[他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け (Relation with other Courses)]

最終更新日：2010-01-24

なし

[成績評価の方法 (Requirements & Grading Allocation)] 最終更新日：2010-01-24

平常点による。

[成績評価基準の内容 (Grading Criteria)] 最終更新日：2010-01-24

平常点による。

[受講生に対するメッセージ (Message to Students)]

[その他 (Additional Information)]

其他研修活動

一、他校旁聽

(一) 2009 夏学期

授課老師：齊藤希史（東京大學比較文學比較文化研究）

科目名稱：演習

5月29日 休講

6月5日 金成恩：帝国・学校・ジャーナリズム

6月12日 議論・コメンテーター：宇野

6月19日 二村淳子：1930・40年代のベトナム美人画

6月26日 議論・コメンテーター：箱崎

7月3日 宮田

7月10日 議論・コメンテーター：権保慶

(二) 2009 冬学期

授課老師：齊藤希史（東京大學比較文學比較文化研究）

科目名稱：演習

10月16日 齊藤希史：イ・ヨンスク「文字から文体へ——漢字と言語的近代」

10月23日 箱崎緑：間テキスト性から見る現代日本における三国志翻案小説

10月30日 議論・コメンテーター：二村淳子

11月06日 柳忠熙：「天馬」から見た知識人玄龍の演劇的的な生

11月13日 議論・コメンテーター：箱崎緑

2010年01月08日 吳燕：『灯台守』翻訳の巡り

2010年01月15日 議論・コメンテーター：柳忠熙

二、研究会・讀書會

(一) 太平洋を泳ぐ研究会

◎簡介：由東京外國語大學、東京大學、一橋大學的碩博士生組成，成員有韓國、北朝鮮、日本、台灣的學生，成員之間的研究共同研究為殖民地研究、東亞細亞研究等。

◎留學期間參與的部分：

2010年5月19日：1、尾崎文太：エメ・セゼールの戯曲作品と政治思想
——1940年代から1960年代まで

2、大野百合子：沖縄返還運動研究

6月23日：1、大田剛：フランツ・ファノン『地に呪われたるもの』
再読

- 2、片岡祐介：クリス・マルケル『レブエル5』——東京外国語大学のプロジェクトからの考察
- 7月21日：1、西 亮太：サイドをその可能性において読むということ
- 2、許倍榕：リアリズムと「大衆」についての論争
- 3、和田圭弘：Tracing Realism in Korean-Japanese Comparative Literature
- 8月4日：川口恵子：『ジェンダーの比較映画史』
- 9月1日：討論

(二) 1930年代台湾の大衆文学研究会

◎簡介：2010年7月由一橋大學言語社會研究科松永正義教授與星名宏修教授共同發起、主持，將為期一年，並於研究會結束後舉辦研討會。研究會的主題為1930年代台灣的大衆文學，預定就媒體與消費文化、文藝大衆化論、漢文小說、日中台之比較等面向進行討論。

◎留學期間參與的部分：

2010年7月3日：討論

7月31日：許倍榕「文芸大衆化論再考」

9月4日：張志樺「台湾通俗漢文の形成および変化——『風月報』をめぐって」

(三) 昭和イデオロギー研究会・第3期「中国論を読む」

(昭和意識型態研究会・第3期「閱讀中國論」)

◎簡介：由《東亞論》作者子安宣邦主持的思想史講座、研究会。第1期主題為「近代的超克」；第2期為「和辻倫理学」；第3期為「閱讀中國論」。

◎留學期間參與的部分：

2010年5月8日：

講座序・東アジアを考える・子安宣邦

報告・小林秀雄と戸坂潤・その2・宮川康子（京都産業大学）

三、其他

(一) 研討會・工作坊

1、日本台灣學會

會議名稱：日本台灣學會第11回學術大會

時間：2009年6月6日

地點：日本大學文理学部

2、九州大學韓國研究中心

會議名稱：韓国・台湾から帝国<日本>を考える

(從韓國、台灣思考帝國「日本」)

時間：2009年12月19～20日

地點：九州大學國際ホール(福岡市東区箱崎6-10-1)

(二) 松永ゼミ合宿(集訓)

時間：2009年7月11～13日

地點：山中湖

研究發表：

- 1、加藤博政：領台初期における日本人講習員の台湾語学習に対する考え
- 2、蔡承維：日本統治期に於ける台湾原住民研究史の研究
- 3、呂美親：多重的な「言文運動」と戦前の台湾語文学の発展
- 4、林琪禎：「国民学校令」の植民地適用：「国民学校令施行規則」・「台湾公立国民学校規則」・朝鮮「国民学校規程」を見る
- 5、許倍榕：日据時期リアリズム文学の評論を巡り

(三) 討論會

1、第20回駒場国漢フォーラム(第20回駒場國漢討論會)

時間：2010年1月4日

地點：東京大学駒場キャンパス18号館コラ4階コラボレーションルーム3室

發表：

- 1、山口智弘：古義学及び祖徠学による詩文制作と名物考究——徳川中期經学考
- 2、村上克尚：言葉を奪われた動物——大江健三郎「飼育」をめぐり江藤・三島の批評の問題点
- 3、斉藤希史：和習・訓読・仮名——東アジアにおける文字化と言語化のダイナミクスとして

研修期間之研修發表

伊藤整『文学入門』：現代社会と人間

2009/7/6 松永ゼミ

許倍榕

★本章の構造

- I、近代文学の弱点：不十分な真実（個人主義、作者の署名、紳士体面、良心的な判断）
- II、主因：近代社会の機械化、組織化
- III、芸術の形式の反映：抽象化、内面化（心理→個人の喪失）

1 近代文学のゆきづまり

- 1)、近代小説は人間の自由と解放を主張し、人間の個性を尊重する役目をしてきたが、それは一面では人間のエゴ（自我、我欲）を掘り出したようなものであった。
→「自由、平等、博愛」
 ↘自分を生かそうとするあまり、他人に対して残酷な働きをもする醜悪なものである。
- 2)、以上のような特質から、近代文学のやり方に対する疑問が生まれた：a.作者自身の人間性を壊すことになるのではないかと b.人間性を十分に描き尽くせないのではないかと

3)、古典文学と近代文学：

古典文学	近代文学	日本の私小説
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一個人だけの力によってできたものではない。→層を重ねてできた。 ・ 誰か本当の作者であるか分からない。 <p>→深い真実、もっと残酷に人生の姿（他人の運命にかまわず自分だけ生きていたい）を伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人主義（人間の個性、オリジナリティの尊重） ・ 作者は署名した個人創作。 <p>→紳士の体面、個人の良心→不十分な真実</p>	<p>日本人特有の「自己放棄」 紳士の体面 良心的な判断 恥 →古典作品に近い力を生み出すことができた。</p>
<p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 古典文学の力： オルダス・ハックスレー（Aldous Leonard Huxley, 1894-1963, イギリス）はホーマア「オディッセイ」についての評論。（P222~224） 	<p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トルストイ「イワン・イリッチの死」→農民の純真、本当の愛 ・ ドストエフスキイ：醜悪な人間は半面美しい人間である。 ・ カミュ「パスト」：調和的な秩序 	<p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 徳田秋声「仮装人物」

2 進歩という危機

※近代社会の「進歩」:

1)、自由

2)、近代社会:

社会全体の組織が固定して流動性を失ってきた。(既得権を守る人間が社会を実質的に支配している)

→良心的な人間は二重人格(表面的な自分/本心)を持って生きようになる。

3)、生産形式:

人間生活の手段であった生産形式が逆に人間を支配する傾向がある。

→人間の機械化、非人間化

4)、大衆媒体(新聞、雑誌):

新聞や、雑誌が大部数になると、ほかの意見を呑み込んで、人間の思想を支配する力が大きくなりすぎるという危険が生まれる。

→人間は本来の自分を失うことが起こりがちになる。

5)、近代政治:

政党や政府はジャーナリズムの力を利用して、自分の立場を守ったり、組織の保存と強化をしようとする。そうすると、根本の人間尊重という動機を無視しがちになって、人間(党员、国民)の自由を犠牲にする場合もある。

→組織化の危険(「変化することによって作り出す進歩」という観念が失われた組織は、その中に生きる人間にとって残酷なことをする)

6)、組織と人間の存在:

組織なしには人間の存在が在りえない。

→人間の理性、集団の秩序と力の集中のための宗教、道徳、政治の必要性。

→「自由を、現在の巨大な力を持った組織と対置させ、どのようなものとして貫くか?」⇒現在の社会の根本問題

3 組織と人間

1)、近代社会における人間存在の不安定感

人間が近代社会で主張した自我と追求した自由が、結果として個人は不安定な、内(心理的、性的)からも外(経済的、社会的)からも揺すぶられているところの、壊れやすいものであることが分かった。

2)、芸術の形式はそのことを反映して変わってくる:**抽象化**(人間を動かしているものは、物の形でなくして、陰に隠れているものの抽象的な力(ex:組織の力)である)

3)、小説の描写:心理を描く方がより真実な小説だと思われてきた。



個人の喪失、人格の喪失(人間を本当に動かすものは心理でもなく、環境の条件によって人の存在は変わるという恐怖、不安

定感)

Ex:横光利一「機械」(1930)、谷崎潤一郎「卍」(1928)、佐藤春夫「のん・しゃらん記録」(1929)、川端康成「禽獣」(1933)

黄耀進の研究報告「『片格転動間的台湾顕影』のドキュメンタリーから見れば、幾つかの考え」に関するコメント

許倍榕

1. 植民地時代政府当局によって製作されたドキュメンタリー（宣伝映画）を対象とする研究には、二つの基本的役目があると思う。
 - a. これらの映画を通じて、以前とは異なる発見或いは歴史解釈がみえてくるか？
 - b. 「ドキュメンタリー」の分析を通じて、他のジャンルや研究対象とは異なる情報がみえてくるか？→このテーマについて、研究者は少なくとも一つの問いに答えなければならないのではないだろうか。

2. この研究報告のなかにこのような意図がないとは言えず、また、研究者もそれを扱う能力があるはずである。けれども残念なことに、報告に書かれていることの多くが、いろいろな理論を引用しながら、内容自体はそれほど真新しいものではないようである。

この研究報告を読んだ後の印象は、文中に見られる「説教」や「教訓」といった要素が「研究」や「分析」を凌駕してしまっているということである。研究者自身は明言していないが、研究報告の中で批判しているのは、主として次の三者のようである。：1)、植民者（昔の植民者、今の強勢、強者、マジョリティ文化）2)、映画の中に再現された台湾人 3)、今の「被植民者」（強勢文化に対する反省がない人々、ある所謂「台湾本土意識」持つ人々）

これらについて順に述べる：

1)、植民者（昔の植民者、今の強勢、強者、マジョリティ文化）：

この部分について、研究者が読者に注意を促すのは、「映像の背後に隠された思想と文脈」とか「映像の中の植民とポスト植民の意味」ということである。しかし先に言ったとおりに、この研究報告の中の「植民地の統治」に関する分析は、ただ「理論の紹介」を通して、いろいろな統治方法とか策略を述べるだけである。（例えば：凝視、他者化、監視システム、再現など）これは理論を学んだことがあるか、または植民地歴史研究に関わる読者にとって、新しい視点とはいえないのではないか。

2)、映画の中に再現された台湾人：

研究者の映画内容の分析は、ほとんど「見た事をそのまま話した」だけだ

と感じた。もし「観衆が見たらすぐ分かること」ばかり述べるなら、「映画の研究」とは言えなくて、単なる「映画の紹介」になってしまうのではないだろうか？

例を挙げると、報告の7ページにある

「、、、ただし画面中の青年たちの表情或いは動作も傍白のような真面目な感じを我々に与えられた。つまり、彼らの身体、精神またイデオロギーとも十分に植民され、コントロールされた。」

というようなものである。

これらの映画の製作は事前に計画を立てて、台本を用意して行われたであろうし、出演者達は、その意思に関わらず、あるいは強制されながら、自らが「記録されている」ということをはっきり意識していたことも容易に推測できる。

映画の中のナレーションに「青年たちは皆一心不乱に働いて、天皇陛下に忠誠を尽くすことだけ考えてる。」というようなものがあつたが、この場面を見ながら私が想像したのは、この人は多分お腹が痛いけれども必死に我慢しているのではないか、とか、この人は家のことを心配しているのではないか、とか、この人は畑のことを気にかけているのではないか、とか、この人は隣村のある女の子に会いたいとおもっているのではないか、、、といったようなことである。

ここで私が言いたいのは、研究者が文中で紹介しているポストコロニアリズムやポスト構造主義、そして前皆で一緒によんだ『客分と国民のあいた』など、これらの理論、著書が教えてくれているのは、『再現された他者』が必ずしも支配者とか知識人とかが再現するままの姿であるとは限らない」ということではないだろうか

3)、今の「被植民者」(強勢文化に対する反省がない人々、所謂「台湾本土意識」を持つ人々)

この部分は多分この報告の中で最も人に注目される場所だと思う。研究者は報告の前半に映画内容及びその時代意義や効果について述べた後、次にこの様な映画から人々が連想するであろう現代の問題について検討しようとしているようである。つまり、このような作品、或いは植民者(昔の殖民者、今の強勢、強者、マジョリティ文化)の価値観といったものが、今日の世界や台湾にも影響を与えていて、文化主体の再建を妨げているということを討論していきかけたようである。

研究者は討論しているのは「台湾ナショナリスト」、「本土政党」、「本土文化勢力」といった所謂「台湾本土意識」を持つ人々である。これは積極的な問題点のようであるけど、実は台湾研究をしている人にとって、このような「批判の対象」はやはり曖昧である。研究者は報告の最後まで、「具体的に」批判する対象は一体誰なのか、よく見えていないのではないだろうか

か？所謂「本土主義」や「本土意識」を有する人や言論は、一体誰、何を指しているのか？

確かに、研究者の指摘している通り、今まで所謂「本土派」から時々いろいろな極端な言論が出てきた。もし研究者が台湾の文化界の人々にこの問題を提起すれば、たぶんほとんどの人は同感して、そして本土主義に対していろいろな意見や不満や批判を表して、こんな問題は「他人」の問題であるような態度を示すかもしれない。

つまり、所謂本土主義の言論の問題がないわけではない、けれどもこれは最近発見されて始めて討論された問題であるともいえないのではないだろうか？

所謂「本土派」のうちにもいろいろな矛盾や衝突や論議があって、このあいだ台湾社会や学界の人々はずっといろいろなことを検討して、議論して来た。その中でポストコロニアリズムや新植民地主義や本土主義など多くの問題に触れている。

もし研究者が今の台湾社会と台湾文化界の変化をちゃんと観察しなくて、漠然たる印象で「反省」して、批判するなら、すでに存在し、みながわかっている問題を元のところにそのまま置いて、「反省できているのは私たちだけで、ほかの人はまだできてない」という錯覚におちいって、何度も「ステレオタイプの台湾イメージ」を繰り返してるだけである。

また、この部分の討論、即ち「新植民主義と脱植民意識」に関する議論と今回の映画研究は一体どんな必然的な関連があるか？私の推測は先に述べた通り、研究者はたぶん「このような作品、或いは植民者（昔の殖民者、今の強勢、強者、マジョリティ文化）の価値観といったものが、今日の世界や台湾にも影響を与えていて、文化主体の再建を妨げているということ」について討論していきたいのだと思う。もし本当にそうなら、討論の展開が少し速すぎるのではないだろうか？一般的に言えば、最初に「この映画或いはこの様な映画が今の台湾で「使用された、あるいは利用された」という問題」を設定して、そこからこれらの映画に関する基本的な情報、例えばなぜ、いつ、誰によって、どんな文化立場で復元され、映画そのもの、及び殖民地時代の歴史や統治者の統治内容や文明観についてどのような論議がされているか、ということを中心に検討して、そうして初めて、これらの討論の中に確かに研究者の言うような本土主義の問題があるかということに繋がっていくのではないだろうか？

このような順序が妥当かどうかは確かではなく、最後に本土主義の問題と関連があるかないかもまた分かっていない。それなのに、研究者はこれらの基本的な情報にあまり触れずに、直接に本土主義の問題に飛躍してしまっているようである。このような論の発展は読者に混乱を引き起こしてしまうのではないだろうか？

3、次は、報告についてほかの意見：

1)、例えば研究者は「三、観点の問題—植民者が台湾に対する他者の凝視」の中で、四つの映画を三種類に分けているが、この分類とその後の分析の間に明確な関連がないようである。もし分類から分析するなら、読者の私が知りたいことは多分これらの映画のタイプや撮る方法や叙述の方法はどんなところに観察する価値があるか、及びこれらは映画史や映画研究や殖民主義研究の中で、どのような新しい観点をもたらしてくれるのか、ということである。

しかし研究者は分類した後の討論に、ただ「このような「客観的」な映像記録／研究方法」がどのように殖民統治者に協力したのか、という分析と結論を持ち出している。この結論は、一見すると『南進台湾』など四つの映画を分析した後に得た物のように見えるが、本当にそうなのだろうか？研究者は事前に「このような映画は殖民統治者に協力してる」という認識を持ったうえで、『南進台湾』など四つの映画をこの分析の枠組みや理論に入れて、テキストで理論を証明しているかのようである。これでは研究の研究対象として『片格転動間的台湾顕影』をほかの映画やテキストと入れ替えても、分析や結論は変わらないのではないか。そうであるなら、ここで『片格転動間的台湾顕影』を取り上げる必然性もなくなってしまうのではないだろうか。

これに関連するのが、先行研究の問題である。現在ある『片格転動間的台湾顕影』に関する先行研究は、私が調べただけでも：

- a.謝侑恩《影像與國族建構——以國立台灣歷史博物館館藏的日據時代影片《南進台灣》為例》，台南藝術大學，音像藝術管理研究所碩論，95 學年度。
- b.陳瑩潔《影片修復與保存——從科技、文化、哲學到政策面向的分析》，台南藝術大學，音像藝術管理研究所碩論，96 學年度。
- c.周怡卿《從日據時期電化教育影片探討後殖民文化認同之面向》，崑山科技大學，視覺傳達設計研究所碩論，96 學年度。
- d.周湘雲《日治時期台灣熱帶風景之形塑——以椰子樹為中心的研究》，清華大學歷史研究所碩論，97 學年度。
- e.三澤真美恵「台湾総督府の映画利用——残存するフィルム資料の分析を中心として」 帝国主義と文学国際共同シンポジウム 2008 年 8 月。

があり、実際はもっと多いかもしれない。中でも、三澤の論文は、相当の紙幅を割いて『幸福的農民』を分析して、台湾総督府の統治方法や宣伝戦略を討論している。ただ、この論文は研究者の研究と直接的な関係があるものの、正式な出版物ではないので、同意を求めなければ、引用や討論はできないということである。（しかし黄さんの報告にあるタイトルとか内容とか三澤の論文とかさなるようである、これが先行研究の引用や討論にあたるのか、慎重にしなければならないと思う。）

この論文以外にも先に列挙した論文は多かれ少なかれ研究者が関心を向け

ている映画研究や殖民主義研究に触れている。これらを検討するのはこの研究の基本的作業ではないだろうか。

2)、理論の問題：

a. 「テキスト」や「歴史イメージ」で理論を証明することについて：

例1：先に示した『片格転動間的台湾顕影』についての分析。

例2：報告の9ページに「、、、そして戦後台湾人が国民党に対する失望のため、返って日本植民地時期を懐かしくなったことも加えて、サイドの論述の有効性が証明できると考えられる。」というようなものである。

b. 必要がない理論や専門用語：

例1：報告の前半は大きな紙幅を割いてドキュメンタリーに関する理論を紹介してるが、この研究との関連がはっきり見えないと思う。

例2：7ページに「記号論の観点から見れば」の部分、もし読者にとって読みにくい記号論の専門用語を取り除いても、多分この結論に何の影響もないのではないか？

c. 理論を運用することについて：

例1：ポストコロニアリズムの討論の運用のところで少し混乱しているように感じた。例えば：ページ8でメンミの理論を紹介してるところで、「しかし、新たなアイデンティティの再構築中、どうやって「自己陶酔的なアイデンティティ」が避けることができ、そして「植民の枠組みの繯れ」からも離脱できることは、本土主義が対面しなければならない困難な挑戦と言えよう」という説明したのに、ページ9に「ここでの台湾本土意識はメンミの指摘したことと比べると若干不足なところがありながら、サイドの「植民地宗主国の日本に対して、帝国の残光を懐かしむ」という論述により近いと考えられるかもしれない」という意見を持ち出してる。しかし所謂「メンミの指摘したことと比べると若干不足なところ」はどういうことであるかよく明らかでないと思う。もしメンミの理論が研究者の討論したい台湾本土派の問題について語るときに適当でないものであるなら、最初からサイドの理論だけちゃんと討論して、台湾の問題と連結すればよいのではないか？

確かにこれらの理論はある部分で、研究者が関心を持っている主体再建を目指す人々の植民者の価値観に対する考えを検討するうえで関連しているが、もし研究者が主に討論したい問題が「帝国の残光を懐かしむ」という問題だけなら、報告のように、たくさんの理論を詰め込む必要はなく、必要な一部分だけを整理して使えばすむ問題ではないだろうか。

3)、報告にある四つの映画の紹介は、『幸福的農民』以外、ほとんど『片格転動問的台湾顕影』のカバーに記載されているものの翻訳にすぎない。もし引用するなら、出所をはっきり記さなければならないと思う。

以上。

「文芸大衆化」再考

1930年代台湾の大衆文学研究会

2010/7/31

許倍榕

一、「文芸大衆化」についての論争：

※台湾新文学運動が発足して以来、知識人の間での普遍的な共通認識と目標：

「民衆のために書こう」・「民衆へ文学を紹介しよう」・「貴族階級から文学を解放しよう」・「現実を明らかにしよう」・「民衆の生活を書こう」・「文学を通して民衆を教育しよう」

→1930年代以降、実際に文学運動の行き詰まりがあり、そして階級運動の影響もあり、文壇の中でいろいろな論争が起こった。

(一) 課題：

- 1、言語
- 2、内容：真実を表現すること
大衆をつかむこと

(二) 論争：

1、郷土文学論争（台湾話文論戦）

- ・民衆の読み言語の問題
- ・台湾話文 vs. 中国白話文

2、リアリズムの路線¹

- ・民衆の生活に関して、そして民衆に親しまれる題材を書くこと
- ・階級調和（階級の問題を越える）vs. 階級

3、民間文学整理論争

- ・民衆の中で生れて伝承されて、そして今まで彼らの生活に存在してる文学形式。
- ・文学立場 vs. 民俗学立場

4、「大衆」の定義の論争

- ・(1)「通俗」についての考え (2)「誰」のために書く？
- ・小ブルジョアを主体とする大衆 vs. 下層階級を主体とする大衆

¹ 階級調和と主張するのは葉榮鐘の「第三文学」・張深切の「道徳文学」・劉捷の「社会主義リアリズム」であり、階級立場のは楊達の「真実なるリアリズム」である。

二、民間文学整理論争：

(一) 論争前

民間文学整理論争以前、当局や民間によって相当な整理成果がもう生れていた。²郷土文学論争の時、黄石輝・郭秋生には民間文学で文芸大衆化を果たそうという主張があった。おそらくこの頃に、民間文学を新文学運動と結びつける討論がだんだん増えてきたと考えられる。1930年代の作家たちの民間文学に関する文章や発言を見ると、彼等が実際に民間文学整理の「動機」と「方法」について一定の共通認識を持っていたことがわかる：

1、民間文学整理の動機：

- (1) 台湾研究・本土文化遺産の再認識
- (2) 大衆の中に共通語を探し、教材をつくる。³
- (3) 大衆的な題材や形式を考察する。

2、方法についての共通認識：

- (1) 「科学方法」で批判しながら摂取して研究する。
- (2) 「文学方法」で改作する。

では、論争はどのように起こったのか？

民間文学整理論争一年ほど前、郭秋生が郷土文学論戦期間の中で書いた文章にその一

² 除了早期由日本官方或民間著手進行的臺灣慣習調查之外，1918年日人平澤丁東採集編纂了首部臺灣民間文學的專書《台灣之歌謠》；根據李獻璋的說法，「大正11年（1922年），廈門謝雲聲氏「把泉州綺文堂刻的「台灣採茶歌」，僅將內容的次序稍行移動，題為「台灣情歌集」，做廣大的民俗學會叢書刊行」；1926年張淑子曾輯錄臺灣民間的俚諺、童謠、謎語，出版《教化三味集》，然而這本書的內容，大抵仍依循傳統的「文以載道」標準進行作品的取舍，偏重於民間文學的教化功能；接著是鄭坤五，於1927年6月開始，在《臺灣藝苑》開「臺灣國風」專欄，此舉帶動了臺灣文人陸續投入民間文學的蒐集、整理工作，例如1930年9月創刊的《三六九小報》裡，有饒紅主持的「黛山樵唱」專欄，繼續採集發表民間歌謠，以及如蕭永東在《三六九小報》裡的民歌仿作，可以說這類強調臺灣本地語言、重視本土文化的民間文學採集工作，是由傳統文人開風氣之先。（見施懿琳，〈民歌採集史上的一頁補白——蕭永東在《三六九小報》的民歌仿作及其價值〉）；1931年1月，《臺灣新民報》推出徵集歌謠計畫，醒民（黃周）同時發表〈整理歌謠的一個提案〉，該文一出「懶雲氏的贊同與全島同好者的支持，就在該報解放紙面，廣向各處讀者徵募，居然於半年間得百餘首純樸的長短句，範圍也比從前廣泛得多了。」；繼而鄉土文學論戰期間黄石輝、郭秋生等人倡議結合民間文學以推動文藝大眾化，同時期郭秋生在《南音》「臺灣話文嘗試欄」裡實際進行歌謠的整理；1933年《福爾摩沙》雜誌創刊號刊載蘇維熊〈試論臺灣歌謠〉；1934年李獻璋在《臺灣新民報》上發表〈臺灣謎語纂錄〉；1935年臺北文藝協會的機關誌《第一線》推出了臺灣民間故事特輯之後，論戰遂展開。1936年李獻璋編纂的《臺灣民間文學集》由台灣新文學社出版。

³ 黄石輝，〈解剖明弘君的愚論〉：「鄉土文學若是發達，一切的文學作品，以及民間故事、童謠、俗歌…會得和文字合作，臺灣話會得文字化，一方面編輯淺白的讀本散佈入群眾裡去。（中略）如果這樣，漢文科廢做伊廢，書房禁做伊禁，臺灣群眾的識字層亦一日一日擴大。一方面識字層擴大，一方面會得誘發群眾的文學趣味，臺灣的文學就有長足進步的期待。」，《臺灣新民報》，1933年11月5日～9日。

端が示されている。

「台湾民間文学を広めるには政府の力もほかの支持勢力も要らず、もともと大衆生活の産物である。だから醜いものと見なされるけれども、なくてはならないものでもある。」⁴

ここでは二つことが示される：

- 1、民間文学「醜いものと見なされる」→「価値判断」の問題に触れている
- 2、民衆には「なくてはならないもの」→「大衆性」の特性を持つこと

→「大衆性」に関しては、大体新文学運動の「文藝大衆化」の文脈の中で作家たちの共通認識であり、そして研究と利用の必要があると考えられていた。しかし作家たちは「醜いものと見なされ」ていた民間文学についてどう考えていた？これは民間文学の整理・研究・改作を主張した作家たちの間で大きな違いがある。

(二) 論戦

廖毓文は戦後書いた「台湾文藝協会の思い出」の中で、当時台湾文藝協会から発行された『第一線』が出た後、当期の「民間故事特集」で文壇の人たちが「民間文学の価値についての問題」を巡って議論したことについて触れている。

「張深切と李献璋・僕、数ヶ月の間台湾の『新民報』・『台湾新聞』・『東亜新報』で紙上弁論を交えた。今回の論争は観点の相違で起こった。つまり僕と李献璋は民俗学的立場であり、張深切は文学的立場である。しかしその結果は僕たちを大いに励ますこととなり、やがて李献璋の『台湾民間文学集』が出版された。」⁵

廖毓文が言及した文献、つまり1935年前後の『台湾新民報』・『台湾新聞』・『東亜新報』などは散逸してしまったため、論争の全貌を知ることはできない。けれどもも現存している『第一線』・『台湾民間文学集』等のテキストを通して廖毓文たちの「民俗学的立場」の内容を考察できる。張深切の民間文学についての考えについては、彼が同じ時期に書いた台湾民間の通俗文学についての論文からある程度手がかりをつかめる。また、張深切と同じ時期に『台湾文藝』に掲載された夜郎、劉捷の論文も重要な参考文献である。これらを通して、「文学的立場」も明らかにできるのではないだろうか。

⁴郭秋生、〈還在絕對的主張建設「台灣話文」〉、《台灣新民報》、1933年11月11日～26日。

⁵廖毓文、〈臺灣文藝協會的回憶〉、原載於《臺北文物》3：2，臺北市文獻委員會，1954年8月20日。收錄在李南衡主編，《日據下臺灣新文學・明集5・文獻資料選集》，臺北：明潭，1979年3月初版。頁369。

	民俗学的立場	文学的立場
今読める論争期間の文章	<p>1935年1月：</p> <p>『第一線』：台湾民間故事特集⁶</p> <p>*特集中に「民間文学」に関する文章</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黄得時「巻頭言：民間文学の認識」 ・HT生（林克夫）「伝説の取材と描写の諸問題」 ・茉莉「民謡についての管見」 ・廖毓文「編輯後記」 <p>1936年6月</p> <p>『台湾民間文学集』の出版（台湾新文学社、1936年6月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頼和「頼序」 ・李獻璋「自序」 	<p>1935年2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜郎「『第一線』寸感」（『台湾文藝』2：2） <p>1935年5月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・張深切「『台湾文藝』の使命」（『台湾文藝』2：5） <p>1935年7月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・劉捷「民間文学の整理及びその方法論」（『台湾文藝』2：6）
	<p>論争の焦点が二つがある：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、特集について 2、「民間文学の価値問題」について 	

⁶ 特輯中収録的民間故事計14篇：毓文〈頂下郊拚〉、黄瓊華〈鶯歌庄的傳説〉、一騎〈新莊陳化成・下港許超英〉、一吼〈鹿港愍光義〉、沫兒〈台南邱懋舍〉、李獻璋〈過年的傳説〉、一平〈領臺軼事〉、描文〈賊頭兒曾切〉、陳錦榮〈水流觀音・王四老〉、蔡德音〈碰舍龜・洞房花燭的故事・圓仔湯嶺・離縁和崩埃仔山〉。

<p>1、特集について</p>	<p>一、特集の要点：</p> <p>★黄得時：</p> <p>1、伝説故事（今まで収集したのは歌謡が多い） 2、収集（第一期）→整理・比較研究（第二期）</p> <p>★廖毓文：</p> <p>1、台湾の特殊な故事（『福建故事集』に収集されたものは割愛する）</p> <p>二、整理の方法</p> <p>★HT生（林克夫）：</p> <p>「…史的唯物論は私たちに多くの実証方法を示す。若し前述の科学的なものを根拠として、過去の客観的な現実を把握して、現実的な芸術概念化の手腕を加えれば、必ず十分な伝説資料を得ることができる。」</p>	<p>★夜郎：</p> <p>「芸術価値から見れば、民間の口伝より劣り、意義価値からみれば、迷信を宣伝してる「有字天書」といえる。得時氏は巻頭言に「整理・研究は後世の私たちの義務である」と言っている。たしかにそうであるが、作品の陳列だけで、整理、研究はどうするのか？これは反動である。「畫虎不成（すぐれて物事をまねて、結局失敗すること）」の反動！」</p> <p>★夜郎：</p> <p>「何故 HT 生主張する…方法で描写して表現しないのか？何故紹介するのみであるのか？」</p> <p>★劉捷：</p> <p>「最近の新聞雑誌に発表された民間文学に就いての文学は何れも一定して研究の方法持たず漠然とした蒐集ばかりである。そのため遂ひに「民間文学」の整理について論争が惹起されたのも偶然ではないと思う。」</p> <p>・夜郎の特集に対する「整理は？研究は？」・「紹介するのみ」という批判や、劉捷の「漠然とした蒐集ばかり」という言い方から、彼等は実際に特集で予告した二つ段階について十分な認識を持っていなかったといえる。</p> <p>・この二つの立場は、整理の方法について共通点がある：1、科学で研究する 2、文学手法で書く。</p>
<p>2、「民間文学の価値問題」について</p>	<p>★黄得時：</p> <p>「人類がこの世界に現れて以来、歌謡・伝説・神話など所謂「民間文学」が生まれてきた。歌謡は原始人の自然に対する賛美であり、伝説・神話は原始人の自然に対する解釈である。前者は感情的な生活であり、後者は理知的な生活である。日本の『古事記』・中国の『詩経』・ギリシア神話など、どれも原始人の芸術観・哲学観・人生観・宇宙観の表現といえる。それらが後世の文学に与えた影響は大きい。」</p>	<p>★張深切：</p> <p>「今の台湾民衆（識字階級）の大部分は奇妙で筋の込み入った不思議な話が好きでありながら、描写の良し悪しについてはあまり問題にしないようだ。」¹⁰</p> <p>「(前略) もちろん僕らは刺激的な作品を書かなければならない、(中略) 現代の芸術的なイメージと描写方法で改作しよう。そうしなければ、多数の読者の興味を引くことはできな</p>

	<p>「民間文学と後世の文学がいかに緊密な関係であるかがわかる。」</p> <p>★頼和： 「一部士君子に排斥されている民間文学や歌謡が、今でも民衆に受け継がれ、その生命力が維持されているということを、我々は軽視すべきではない。なぜか？それぞれの作品、物語、歌謡が当時の民情、風俗、政治、制度を表現しており、当時の民衆の本島の思想や感情が表れているからである。民俗学、文学、さらに言語学上から見ても、これらは保存する価値があるものである。」</p> <p>★李獻璋： 「文人たちはほとんど旧体制に拘束されており、実際には人生・社会はもともと彼らの想像するようなものではない。腐儒からの教化を受けない民衆のみが、自分の生活と思想を隠さずに表現できる。例えば商人の悲惨な光景を描写した「杏仁茶」や、農村の疲弊を描いた「姑仔你来・嫂仔都不知」や、婦人の境遇と地位について書いた歌詞や、彼らが想像した鄭國姓の伝説など、どれも文章の文字面にばかり拘る文人たちには何百年かかっても書けないものである。文学・民俗学の上での価値を見たら、どんな詩詞に比べても遜色はない。」⁷</p> <p>「この特殊な所謂民間文学は、昔の人々の共通情緒であり、詩的な想像力のすべであり、宇宙万物について考えて出した答えであり、そして民衆の思想や行動の無形な支配者でもあるといえる。われらはそれを通して彼らの宇宙観や宗教信仰やそして自然界についての認識などを観察できる。」⁸</p>	<p>い。こんな事をするのは作家の良心にそむくから、僕らはやる気になれないかもしれない、けれどこれは僕らが負ってる義務ではないだろうか。そうしなければ、台湾民衆は永遠に僕らのレベルに追いつけず、僕らの芸術も民衆から離れてしまうのではないだろうか・・・（後略）」</p> <p>→文学が持つ啓蒙の功用を前提として民間文学の工具性を重視し、「民間の嗜好」を利用し、今まで残された民間文学を書き直し、再創作すべきと主張した。「文学改作」の優先性を打ち出した。</p> <p>★劉捷： 「文学古典」を「批判・摂取・加工」と主張しているが、この「文学古典」は二つの方面に分けられた：1、台湾民間文学の「古典」は、現代社会にとって「歴史研究」の価値を持つ。（本島住民の生産関係、生活様式、言語、習慣、風俗、道德等の研究）2、芸術養分を摂取する際には、世界文化の「古典」を学ぶべきである。</p> <p>「民間文学は群衆の文学である。而して民衆は被支配階級である。民間文学を通じて、或時代の民衆の思考や不平不満を省察し得るが然しその多くは過去に属するので現代人の興味を引くことがあつても次第次第に共感性を失ひつつあることは事実である。民間文学が群衆の作品であり平民の文学であることに熱中するのあまりその現代的意義を忘却し遂ひに民間文学至上主義に陥ることなきよう警戒せねばなるまい。」</p>
--	--	--

⁷李獻璋，〈自序〉，《臺灣民間文學集》，臺灣新文學社，1936年6月。

⁸李獻璋，〈自序〉，《臺灣民間文學集》，臺灣新文學社，1936年6月。

⁹李獻璋，〈自序〉，《臺灣民間文學集》，臺灣新文學社，1936年6月。

¹⁰張深切，〈《臺灣文藝》的使命〉，《臺灣文藝》2：5，1935年5月5日。

	<p>→民間文化の形成の文脈に戻って、その文学価値を理解し、評価する。それを台湾文学の前史として扱う。</p> <p>「(前略) 例えば「林投姊」の物語は荒唐無稽で見る価値も無い思想を語っているようである。しかし、この物語は、人間が死後霊となって、幽冥世界に存在し、生命を持つもの持たぬ物に附属し、社会の権利を主張し、義務をはたせるということを感じたことから生れた。これは無茶にありもしないことをでっち上げたわけではなく、当時の人々の心から生れた必然の産物に過ぎない。」⁹</p> <p>→「科学理性」で民衆の「迷信」を批判することではない、「科学理性」で昔の人々の「宇宙観」や「宗教観」を理解し、解釈する。</p>	<p>「民間文学は彫飾せず自然的文学であるため、現代の作品と比較して粗雑で幼稚たることを免れない。これが小説以上の価値を持つてゐるとは考へられぬ。」(その芸術価値を排除し、民間文学整理の意義を以下に求める)</p> <p>「教育上の補助、学術上の参考、行政上の参考、生活上の調剤とはなり得てもそれが現代に於て、芸術作品として一等の価値を持つてゐるが如く盲断することは過大評価でしかなく真摯なる研究家の採らざる処である。」</p> <p>→民間文学の「再利用」の功用を主張しており、張深切らの考えに近い。だが張深切が「再創作」の文学方面の重要性を主張するのは違い、劉捷は「歴史研究」の価値を強調する。ここでも民俗学的立場と同じ民族遺産の重要性を強調するけれども、民俗学的立場の「民族遺産の再評価」と違うのは劉捷ただ「民族遺産の再認識」のみを提起した。</p>
<p>科学方法で研究する</p>	<p>考察・分析を通して、理解・さらに解釈する。</p>	<p>考察・分析</p>
<p>文学的な意義</p>	<p>現代的な視点で民間文学の文学価値を判断するのは適当ではない。</p> <p>→ 1、現代文学の前史とする。 2、改作の材料とする。</p> <p>※『台湾民間文学集』の「再創作」の特色： a. 語言：台湾話文の運用 b. 内容：「借古諷今」を通して植民地の現実を反映する。(ex: 朱峰〈鴨母王〉、楊守愚〈美人照鏡〉、頼和〈善訟的人的故事〉) c. 「芸術手法」を通しての改作。(ex: 朱點人〈媽祖的廢親〉)</p>	<p>現代文学の文脈から見れば、文学価値に限りがある</p> <p>→でも改作の材料とする意味がある。</p>
<p>民俗学的な意義</p>	<p>昔の文化を再認識することによって、改めて昔の文化を再評価する。</p>	<p>昔の文化を再認識できる。</p>

主張の要点：	再評価 従来存在してる「雅／俗」・「知識階級の文化／庶民文化」の等級関係を検討し、調整する。さらに民間文学の価値を考える。	再利用
→民間文学の討論に関するもう一つの問題。知識人が抱く「昔の素朴な民衆」という想像。この部分はこれからの分析が待たれるが、とりあえず上述した二つの考え方を「植民地」の現実に置いてみれば、「民俗学的立場」の知識人にとって、何故「過去の民間のもの」の「再評価」は大切であるのか？彼等が文化政治の問題（知識人／民衆・殖民文化／本土文化）について相当敏感であったからと言えるかもしれない。これに対し、「文学的立場」は既存の価値観に対する反省、再検討の意図が弱かったといえる。		

三、「大衆」の定義の論争

(一) 近代日本文学中の「大衆文学」

- 1、「純文学」に対する「通俗文学」であり、多数の読者の趣味に応じて書かれた娯楽的な読み物。時代小説・推理小説・家庭小説など。
- 2、発展の条件：1、読み言語の一致 2、商業に基づくマスメディアの発達

(二) 台湾の場合

当時の台湾社会は言語が一致せず、そして都市部以外では消費文化がまだ成熟い
なかつたため、「大衆文学」と言われたとき二種類作品をさす。それは：

- 1、大部分は中国からの伝統的な通俗小説
《三國演義》・《西遊記》・《水滸傳》・《紅樓夢》など、小説や戯曲や講古などの
形で民間で流行する作品である。
- 2、現代の創作方法で作られた娯楽的な通俗小説。

(三) 「大衆文学」の影響

- 1、新文学のやり方に対して検討する
- 2、大衆文学の批判と提唱
- 3、「大衆性」を探求する：「通俗的な」内容・描写方法を利用する。

(四) 「大衆とは何か？」

- 1、作家たち「通俗」についての考え
→批判するのは「製作者」或いは「民衆の知識レベル」

★楊達：

「現在何十万と出て居る大衆雑誌を我々は何時も低俗の一言で片づけて居るが、無論低俗は事実であるが、我々がその低俗の一面ばかりを見て、その大衆性を見逃して来たことは何と言つても間違ひであらうと信じます。これらの雑誌の低俗さはこれらの雑誌の低俗さはこれらの雑誌の編集者及執筆者の道德であり、又イデオロギーでもあるが、大衆を幾百万の大衆を推す魅力を迄この低俗で説明しやうとする我々の方の偉い人は、実際不真面目も甚だしいと言はなければならぬ。」¹¹

★劉捷：

「本島の大衆文学と言っても、中には芸術的価値の高いのが相当あり、一様に卑下するわけには行かない。否、優れたる台湾文学作品は、大いにこれらの大衆文学より適度批判摂取すべきである。只一つ吾人が遺憾に思ふのは、これら大衆小説の内容とするところは殆ど鬼怪神仙の類ひで、ろれが演劇化され或は講古を通じて科学的知識なき民衆の頭に植付けられるので、左なきだに迷信深い島民の迷信的傾向を助長することである。この点は、文学のレアズムの上から言つても或は社会教化の上から見ても、現に伝えられている大衆文学の内容を精密を考慮して改革する必要があり、又一面新時代に適せる文学思想を取入れる必要があると思ふ。」¹²

2、「大衆」的定義

劉捷	楊逵
「大衆」とは「民衆を集团的に表現する為めに用ひられる言葉である	(民衆と大衆)は現状に於ては無論バラバラなもので地理的階級的限界以上には決して集团的表現は現れてゐない。若し、之に集团的表現を与へるとなると、我々は何とかの組織を考慮に入れねばならず、結局は未組織、無意識的多数人を民衆又は大衆から除かねばならず、この解釈そのものは我が劉捷君自身の誇張した大衆の無智とも矛盾を来すものである。
→楊逵は劉捷の「集团的」の意味を問題にした。	
この言葉(大衆)が歴史的に群衆、民衆、大衆の段階で、即ち群衆は原始的な社会を指し、民主はデモクラシー時代の社会用語として、また大衆は階級社会に於て	封建時代に於ける国民大衆を民衆と呼び、ヒットラー時代ファツシヨ時代になつて、一部から民衆の使用が復活しつつある事実は抹殺されなければならない。何故な

¹¹ 楊逵，〈寫給「文評獎」評審委員諸君〉，《文學評論》3：3，1936年3月。

¹² 劉捷，〈台灣文學の史的考察(一)〉，《台灣時報》198，1936年5月。

<p>始めて使用されるようになったものである。</p>	<p>ら、ヒットラー治下に於ても、ファシズム伊太利に於ても、更に封建時代に於ては、デモクラシイなどその片影も見ることが出来ないからである。</p>
	<p>民衆が国民的に支配階級に対立する小ブルジョア、農民、労働者、大衆が（国際的に・・・を入れなければ不正確であるが）労働者、農民、小ブルジョア（前者は小ブルジョアを優位で、後者は労働者を優位）を表現するものとしては正しいのである。</p>
<p>大衆をプロ大衆と遊食者大衆（ブル大衆）に分けない楊達を批判。</p>	<p>文学芸術の上で我々が大衆と言ふ時、それは作者又は文壇に対する読者を意味するものであることは常識であり、社会的構成についても、我々の文学が、僅々四、五％に過ぎないブルジョア又は將軍大地主を問題にしないことは判り切つた話であり、更に、我々が未だ曾つて、銀行家大衆、工業化大衆、地主大衆といふ言葉を聞かない点に見ても、遊食者大衆と言ふ言葉が根柢の「発明」であることが理解することができる</p>
<p>→「範囲」・「分類」の問題ではない、「誰を主体とする」の問題である。</p>	
<p>今迄の文学がインテリのものであるから、芸術が大衆のものであると言ふのは嘘だ。</p>	<p>張氏の論法で行けば、今迄の政治は大衆に縁のないものであるから、無産階級の政治運動は馬鹿げたことだと言ふ結論になる、労働者に権謀術策の政治家がないからと言つて労働者の政治化を否定することは出来ない。労働者政治家のタイプは自から変つたものになる筈である。今の雑誌文学が大衆に判らないからと言つて、文学が大衆のものでない、大衆は文学が分らないなど言ふことは出来ない。</p>
<p>→「大衆」の問題は「誰のためにかく？」に戻る。</p>	

3、二つの態度が二つの異なる路線を決定した

(1) 知識人を主体とする文芸大衆化：現実的な態度（雑誌の経営）

- ・啓蒙主義知識人の文化啓蒙や大衆化についての考え：

影響主体（知識人）→「通俗」を通して→（受身の）客体の受容 →
大衆化の量

・『台湾文芸』の編集方針の変化：
知識階級から民衆へ文学を解放する→ある程度の普遍化（識字階級）→
識字階級の中の「日本語読者」

★張深切：

「現在各種文藝者は熱心に文藝大衆化を提唱している。純文学派・通俗派・
探偵派・プロレタリア派はどれもあがいている。然し、文藝大衆化とは文
藝が本当に文盲階級まで普及するという事ではない、よく考えれば、あ
る程度の普遍化を求めているに過ぎない。各派の芸術作品が文盲階級に読
んでもらえるわけがないではないか。」¹³

「文聯は東京支部からの応援をもらい、東京からの優秀な作品で『台湾文藝』
の水準も上がってきて、島内作家たちの作品がだんだん質が劣るようになっ
てしまった。中国語の作品は日本語の作品と比べてみると見劣りがした。そ
こで、『台湾文藝』の編集方針を変えなければならなかった。故に民族的か
ら政治的に、そして政治的から純文学的に変わってきた。創刊の時の主旨を
維持することが困難になった。

『台湾文藝』は時勢に順応し、純文学雑誌に変えなければならぬ状況で、原
稿は中国語中心から、中国語と日本語を同じくらいにすることになって、最
後に日本語中心になってしまった。これは編集者が偏愛したせいではない、
時勢である。

（中略）日本語の優位の原因は、第一、台湾人の中に日本語教育を受けたこ
とがある人が多く、また当時の日本現代文学は中国より優れていて、文章は
美しく流暢であり、作家にとって書きやすいし読者にとってよみやすいので、
より人気である。第二、日本語は統一の言語とする標準があり、中国語はま
だ統一の白話文がなく、台湾の漢文読者は白話文に慣れてない、まだ白話文
の観賞できるレベルに達していなかった」¹⁴

（2）下層民衆を主体とする文芸大衆化：理想的な態度（政治運動の続け）

・『台湾新文学』

- －日本語の創作が主流になってきた時期、中国語の作品掲載を続けた。
- －言語の問題について慎重に発言した。

¹³張深切，〈《台湾文藝》的使命〉，《台湾文藝》2：5，1935年5月5日。

¹⁴張深切，〈里程碑——又名：黑色的太陽（下）〉，收錄在陳芳明等編，〈張深切全集卷二〉，臺北：文經社，1998年1月。頁76～77。

- 『台湾民間文学集』を出版した。
- 「まだ不十分な識字力しか持たない人々」のために書いた。ex: 「水牛」の敬体日本語
- 「非識字者」のために書くことは無理なわけではない。(朗読、講古)

★吳新榮：

(〈象牙塔之鬼——主駁新垣氏〉：この文章は楊逵、劉捷の論争に、劉捷の意見を賛成した新垣恆一の意見に対して書かれた。)

「文学は大衆のもの」について、新垣氏は「文学は大衆のものというのは荒唐な話である。実際に文学は少数人のものに過ぎない。」と言った。それは事実だが、われらはこの事実を反逆すべきである。われらはこの事実を反逆し、文学は大衆のものと主張するのは政治は大衆のものという主張と同じである。」¹⁵

★楊逵：

「大衆の文学は無論完全に今の如き文学ではないが、大衆には大衆の文学がある。今の文壇文学、文学専門家に読ませる文学は、私の意見では真実の文学ではない。文学の屍とも名づけるべきものである。台湾では文学の屍ではなくて真実の意味に於ける文学が非常に要求されて居り、作家達の多くも、文壇の為めの文学ではなくて、真実の文学の為に苦闘して居る。いい文学は文盲をさへ動かす。無論そこには読んで呉れる者が中間に立たねばならぬし、読む人に依って多少影響されるであらうことも考へ得るが、原始人にも子供にも彼らの芸術観賞眼があり、アンデルセン等が子供に読ませる立派な芸術を残して居る以上、我々が大衆(中でも文化的下層の労働者農民)のために芸術を創作できないなど言ふことは愚劣千万な話ではないか！」¹⁶

四、これらの論争を通じて、何が考察できる？

1、戦後の戦前についての歴史解釈を検討すること

(1) キーワードで評価することの問題：

Ex: 「抗日的な民族的立場」・「台湾的立場」・「主体性」・「辺境性、周縁性」(marginal)・「抵抗性」・「下層大衆への関心」・「下層大衆のために発言する」・「主流文化を批判する」など。

(2) 「民族／階級」の枠組の問題：

戦前から戦後まで繰り返された歴史偏見：

民族派：全民族の利益を考えている。

¹⁵ 吳新榮，〈象牙塔之鬼——主駁新垣氏〉，1935年9月13日作。原載於《臺灣新聞》文藝欄，1935年，月日不詳。

¹⁶ 楊逵，〈台灣文壇の近情〉，《文學評論》2：12，1935年11月。

階級派：農工階級の利益のみを考えている。¹⁷

2 「大衆」の問題について

(1) 知識人と大衆（二つ大衆についての考え）

↓

知識人の大衆観は文学運動のやり方・文藝大衆化の路線、
そしてこのやり方の性質を決定する。

↓（文藝大衆化・大衆文学についての討論に区別しなければならぬ「大衆」の意味）

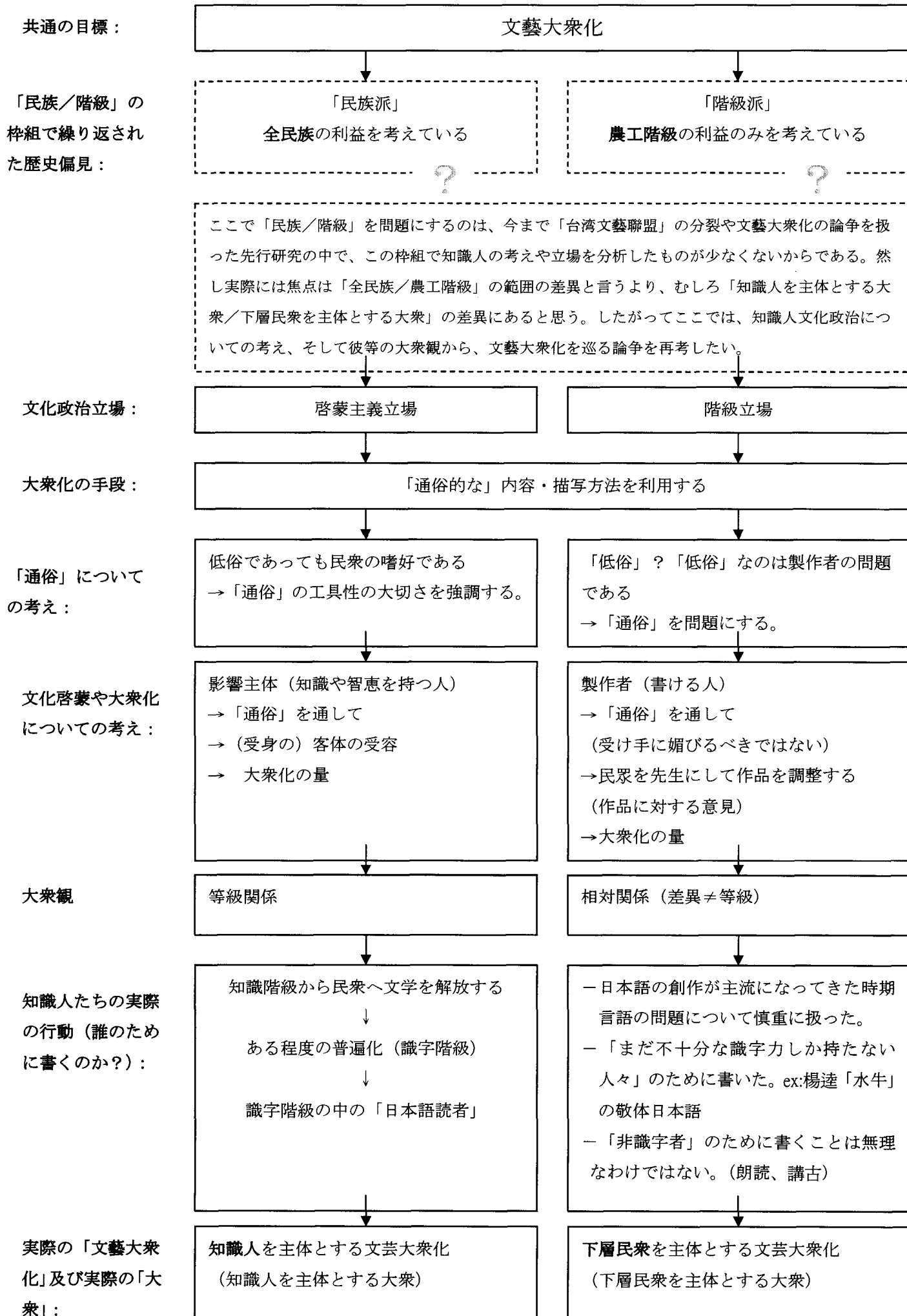
- (2) 二つ「大衆」：「市民」としての大衆（独立思考をもっている）
「群衆」（mass）としての大衆（操作される）

¹⁷ この偏見について、戦前の「改造」論争を一つ反駁の例をとる考察をできる：1927年台湾文化協会が分裂し、11月に蔡培火の「台湾社会改造管見」が『台湾民報』で連載された。この論文は当時の政治運動中における偏った「階級闘争」と「民族運動」を前提として「人道主義」を主張することで、分裂した政治団体を団結させることを目的として書かれた。しかし、「人道主義」は「支配階級をかばう」ことになると指摘した黄石輝は、翌年に新文協の機関誌『台湾大衆時報』で「改造」の改造を発表した。この論文の中で「階級闘争」と「民族運動」の衝突を解明して、さらに「階級的立場」の者が考えるのは「支配階級と被支配階級の対立」であり、殖民地の解放運動は「反帝国主義運動で、それは階級闘争でもある」と明らかに述べた。

「階級闘争を主張しながら弱小民族運動に反対しないとはこういうことだ。民族解放は階級解放でもあるからだ。では、どうして民族運動より階級闘争を主張するのか？これは深い意味がある。階級闘争の持論は階級の消滅を最終の目的として主張する。階級が消滅すれば、圧迫される民族も無くなるのではないだろうか？

もし民族解放のみ追及して、たとえ成功しても、ただ少数人が権利をもらえるに過ぎない。の民族の下層階級はもとどおりに圧迫される地位にいて、ただ外部の者からの圧迫が自民族からの圧迫に変わるだけである。この点について、階級闘争を主張する人から見たらまったく意味が無いと言える。今までの民族運動の結果をしてみよう！」（黄石輝〈「改造」之改造〉、『臺灣大衆時報』第10号、1928年7月9日。頁12、13。）

→20年代から30年代にかけて、殖民地の台湾の政治運動・文化運動の階級論述は、極端な主張もあったけれども、階級運動は民族運動を排除せず、「すべての支配関係」に対して批判するという持論が少なくない。にもかかわらず偏った意味の「階級的立場」が戦後まで繰り返して使われた。



研修期間論文

再談關於「文藝大眾化」的論爭

——圍繞「藝術是大眾的」之相關討論

(未完成稿)

許倍榕

一、前言

重新回頭整理楊逵與劉捷的論戰，主要是希望能補足過去處理這場論爭時，未能接觸以及納進來一起討論的日本普羅文學理論，特別是在文藝大眾化論爭當中，楊逵、劉捷幾次提及的德永直與貴司山治的論爭。嘗試做這樣的追蹤，並非預設或試圖進行理論影響的考察，就目前的觀察，可能也無法輕易做出這樣的連結與評斷。

這幾場論爭發生的 1935 年前後，台灣作家與日本作家雖有類似的處境，像是 1930 年代初組織性的政治運動在日本當局全面鎮壓下走向崩解，作家們同樣面對社會運動的疲弊凋零，與虛無的、去政治化的思想傾向。另一方面，雖然社會結構與近代化的情況有很大的差異，但作家們同樣都在面臨著商業主義的消費文化與大眾社會的形成過程。然而即便是構造類似的文學問題或論爭，台灣作家所對應的畢竟是殖民地社會，同時在 1935 年的這個時間點，底層大眾仍多屬非識字階層，而識字階層的閱讀語言也不統一，這樣的一種現實處境。

然而如果說這幾場論爭及這當中的評論文字在構造上有什麼相近點，我會認為是它們同樣可以觀察到至少兩種思考方式的差異：承認這個世界既有的現實，並在當中奮力尋找出路；或是在體認到「這個世界，被規定成了這個模樣」這樣的事實，而與此現實做著艱苦的鬥爭。所謂「大眾性」、「文學性」的討論，恐怕都脫離不了這種根本的政治問題。

本文希望能透過這些理論文本的討論，重新考察楊逵與劉捷的文藝理論內容，並藉此進一步分析 1935 年前後的台灣社會與文學界的變化及動態，同時作為往後將嘗試延伸的研究方向，希望能對新文學運動中文藝評論的發展進行初步的探討。

二、從楊逵與劉捷的論爭談起

楊逵與劉捷針對「大眾」問題的筆戰，發生於 1935 年下半年，當時他們因台灣文藝聯盟的「宗派化」問題已產生摩擦，1935 年 8 月 11 日的文聯大會之前，宗派化問題已白熱化。大會當天劉捷曾提議將楊逵除名，在大會上兩人也就「派

系」的解釋進行辯論，劉捷將「派系」解釋為「宗派上的分裂主義」，基本上與張深切等人的看法一致，而楊逵則強調「派系」是指文聯內部「其中有一兩個人獨行其事」，也就是少數人專擅。而最後在田中保男的調解下兩人握手言和。不過緊接著在8月17日、21日，劉捷以張猛三的筆名發表〈何謂藝術上的大眾〉，針對楊逵發表於7月29日至8月14日之間的〈新文學管見〉中提到的「藝術是大眾的」這樣的觀點提出批評，楊逵在9月4、5日對此提出回應，發表了〈關於大眾——張猛三氏的無知〉，以及稍後在11月發表的〈台灣文壇近況〉裡對部分議題做補充說明。

由於目前無法看到這場論爭中劉捷與楊逵直接對話的文章〈何謂文藝上的大眾〉，因此劉捷在這場論爭中所表達的看法，只能依據楊逵在提出反駁時，所引用的劉捷的文字，以及同時期吳新榮、呂赫若等人對於這場論爭所提出的一些觀察進行還原。過去在碩論《30年代啓蒙「左翼」論述——以劉捷為觀察對象》中處理這場論爭時，主要透過上述的這些文字，論證劉捷在「看待大眾的態度」上所呈現的啓蒙主義立場¹⁸，銜接他與張深切同為「以知識份子為主體」的文藝大眾化路線，探討他們與階級立場的楊逵在思想上的對立，並嘗試通過這樣的分析，重新思考向來被沿用的「民族／階級」分析框架，在討論戰前知識份子的路線與立場時的問題與不適用性。¹⁹而再重新翻閱這些作家的評論文字時，我還是認為「啓蒙主義立場」與「階級立場」的對立是存在的，但在此基礎上，我也想

¹⁸ 這樣的談法，主要是沿用游勝冠在《殖民進步主義與日據時代台灣文學的文化抗爭》的觀點。將劉捷定位為「啓蒙知識份子」，主要是因為他大抵沿著「文明開化」的思考軸線，以「啓蒙」為手段，將台灣人的「文明開化」作為解放目標，啓蒙知識份子依循20年代以降的自由主義運動模式，他們籲求「自由」、「平等」，批判專制政權，然而受限於資產階級的價值觀，在內部階級問題上較缺乏自省，他們雖然站有一定的民族立場，卻認同殖民進步主義，也就是支配者的現代文化價值觀，正因為如此，比起殖民者對殖民地政治、文化的打壓來說，啓蒙知識份子在主流價值的實踐上，可能扮演著比殖民者更為積極的角色。而位於這種文化立場的劉捷，其評論卻又演繹著大量的左翼理論，但其內容卻缺乏實際的階級反省，為了將他與其他摒斥階級理論的啓蒙知識份子稍做區別，在碩論裡以啓蒙「左翼」這樣的立場討論劉捷的文化位置。

¹⁹ 在碩論《30年代啓蒙「左翼」論述——以劉捷為觀察對象》裡，將「民族／階級」分析框架問題化，主要是參考游勝冠在〈民族主義與階級意識之外的農民運動史觀——台灣農民運動後期的左傾探源〉（《歷史月刊》196期，2004年5月，頁57~64）裡的觀點。將此分析框架問題化，是因為它不斷重複著一種歷史偏見：「民族立場」著重的是「全民族」的利益，為了顧全大局，有時候不得不模糊部分階級問題；而「階級立場」關注的僅是「無產階級」的利益，往往專注階級鬥爭的同時，影響或犧牲了民族運動。這種偏見起因於論者將「運動」、「階級」的內容過度簡化為字面上的意義，無論戰前或戰後，經常以此成見負面化、狹窄化階級立場。因此在碩論裡，我曾藉此觀點討論以「民族／階級」分析框架的先行研究，分別是趙勳達《〈台灣新文學〉（1935~1937）的定位及其抵殖民精神研究》（成功大學台灣文學所碩士，2003年6月），與陳培豐〈大眾的爭奪——〈送報伙〉、〈國王〉、〈水滸傳〉〉（楊逵文學國際學術研討會，2004年6月19日、20日），這兩篇論文在「民族／階級」的框架下討論台灣文藝聯盟分裂前後的楊逵、劉捷等人的立場時，無論是對劉捷的定位，或對楊逵的辯護，都無法有效地迴避這種歷史成見可能帶來的論述上的拉扯或矛盾。其後趙勳達雖然在博士論文《「文藝大眾化」的三線糾葛：一九三〇年代台灣左、右翼知識份子與新傳統主義者的文化思維與角力》（成功大學台灣文學系博士，2009年6月）裡對此提出回應，但重點放在劉捷的定位方面的討論，仍舊沒有觸及「民族／階級」此分析框架下所重複的歷史偏見的問題。而對此游勝冠在〈「轉向」及藝術派反動的純文學論——法西斯主義氣焰高漲中的文聯路線之爭〉（2010年台灣研究國際研討會——日治時期台灣研究：文化移譯與殖民地現代性，2010年6月4日、5日，加州大學）裡，則更明確地分析「民族／階級」這個關係框架，在討論台灣文藝聯盟分裂前後知識份子的立場時的侷限。

試著再進一步討論，這場論爭還提供了一些其他的「什麼」，讓我們能觀察 1935 年前後台灣文學界的動向。

首先，在這裡想提出幾個新的線索，重新追溯劉捷對於「文藝大眾化」的思考，一方面想試著補充過去討論劉捷的文學觀時的不足之處，一方面也想藉此探討楊逵在其文章主張「藝術是大眾的」這樣的想法之後，所引起的其他相關討論。楊逵在這場論戰中，曾幾次提到同時期在日本文壇裡的另一場論爭——德永直與貴司山治關於「文學大眾化」的論爭。根據楊逵的說法可以得知，劉捷在其文章中曾介紹過這場論爭，並且借用過貴司山治的觀點，反駁楊逵所提出的「藝術是大眾的」這樣的想法：

（劉捷）他說「藝術不是大眾的」，這句話的根據只是引用貴司山治氏發表在本雜誌上的文章。關於這一點，等貴司山治的文章完結之後，我也打算加入討論，所以留待他日再談。張猛三說，以往的文學是知識份子的，所以說「藝術是大眾的」是騙人的。²⁰

而到底劉捷所說的「藝術不是大眾的」，是什麼意思？在文化運動陣營裡的這種看似「反文藝大眾化」的言論，倘若不是過於大膽，想必有一定程度的「合理的」、「普遍被認同」的理論支撐，而那是什麼？以下將嘗試從德永直與貴司山治的論爭裡尋找一些線索，借以探討劉捷的說法可能包含了什麼內容或傾向。

三、德永直與貴司山治的論爭

根據德永直與貴司山治的文章，在這場論爭之前，日本普羅文學作家之間圍繞藝術大眾化的問題，曾發生過幾場論爭。第一次是在 1928 年，主要參與者為藏原惟人、中野重治、鹿地亘等人。第二次是在 1930 年，當時貴司山治提出「普羅大眾小說」，他認為勞動者大多喜愛閱讀講談，因此主張以講談的簡易程度進行寫作，並區分了「普羅大眾小說」與「本格的小說」的性質，當時德永直亦贊成此提議，小林多喜二則表示反對。而這個提議後來在普羅列塔利亞作家同盟的第二次大會中遭到批評，主要理由是「高級文學／大眾文學」的二元對立，與普羅文學向來的文學觀有所抵觸，因此作家同盟中央委員會後來在 1930 年 7 月的《戰旗》中發表〈關於藝術大眾化的決議〉，重申反對二元架構下的特殊大眾藝術形式。第三次則是圍繞著德永直 1932 年 3 月發表於《中央公論》的〈普羅列塔利亞文學的一方向〉一文所引起的討論，在這之後德永直發表了〈自我批判「大眾文學形式」的提倡〉。第四次則是 1935 年前後德永直針對貴司山治提倡的「實錄文學」所引發的論爭。而根據德永直的說法，在這場論爭之前，他和武田麟太郎之間也有一場針對普羅文學大眾化問題的論爭。

德永直與貴司山治圍繞文學大眾化的問題的論爭，主要有以下幾篇評論文

²⁰ 楊逵，〈台灣文壇近況〉，《文學評論》2：12，1935 年 11 月。涂翠花譯，收於彭小妍主編，《楊逵全集·第九卷·詩文卷（上）》，國立文化資產保存研究中心籌備處，2001 年 12 月。頁 414。

字：

- 德永直〈卷頭言・「關於創作技術的問題」的提倡〉（「卷頭言・『創作技術に関する問題』の提倡」）《文學評論》，1934年4月
- 貴司山治〈實錄文學的提倡〉（「実録文学の提倡」）《讀賣新聞》，1934年11月9日～13日
- 貴司山治〈《實錄文學》的主張〉（「『実録文学』の主張」）《文藝》，1935年5月
- 德永直〈關於文學之近感〉（「文学に関する最近の感想」）《文藝》，1935年3月
- 德永直〈小說學習（二）〉（「小説勉強（二）」）《文學評論》，1935年5月
- 德永直〈小說學習（三）〉（「小説勉強（三）」）《文學評論》，1935年6月
- 貴司山治〈給德永君的信〉（「德永君への手紙」）《文學評論》，1935年6月
- 德永直〈小說學習（四）〉（「小説勉強（四）」）《文學評論》，1935年7月
- 貴司山治〈文學大眾化問題的再三提起——駁德永君之二三見解〉（「文学大眾化問題の再三提起——德永君の二三の見解を駁す」）《文學評論》，1935年8月
- 貴司山治〈藝術內的藝術大眾論——文學大眾化論的再三提倡（2）〉（「芸術内の芸術大眾化論——文学大眾化論の再三提倡（2）」）《文學評論》，1935年9月
- 貴司山治〈藝術外的藝術大眾化論——文學大眾化論的再三提倡（3）〉（「芸術外の芸術大眾化論——文学大眾化論の再三提倡（3）」）《文學評論》，1935年12月

在這場論爭裡一個關鍵的議論點，是關於「高級文學／大眾文學」的二元論問題。

貴司山治所提倡的「實錄文學」，基本上是在承認現實社會裡存在著「高級文學／大眾文學」這樣的「上／下」結構，而主張作家應該從兩方面進行創作：一方面從事向來的「藝術文學」寫作；一方面為對抗現下流行的虛偽不實的大眾文學，作家應該創作「更健全的通俗文學」，也就是他所提出的「實錄文學」，它並非作為一種嚴肅文學，而是作為一種通俗的「讀物」，便於適應大眾的文化條件，以利大眾的文化啟蒙，使他們能夠逐漸具備欣賞藝術文學的教養與能力。

德永直則反對這種前提式存在的二元架構，他認為這種二元論是根基於既定的價值觀，形成於資產階級所主導的世界，這種價值觀定義了所謂的「藝術性」，也設定了大眾的文化水平。作家所要創作的「文學」，首先必須打破這種既存的圖式，同時將這種既存價值底下的「藝術性」、「大眾性」的意涵予以問題化。

他重新探討「藝術性」的定義，反對將藝術性視為一種「先天性的東西」，並指出所謂「文學技術」絕非只是唯美主義式的東西。在普羅文學運動解體、日本文學界普遍追求回歸「一般性的藝術」的時期，他重新評價普羅文學的文學價值，認為在普羅文學傳統中「生動描寫大眾的表現技術」，是普羅文學獨特的文學資產。而作家所要承繼的文學資產，或是在談論「藝術性」時，不應僅限於布爾喬亞文學所累積的文學技術，而應該廣泛包含這些不同的文學傳統與成就，並

強調「藝術性」的關鍵還是在於思想、感情、生活。對於貴司山治所強調的「藝術追求的是**形象化的完成**」，德永直雖然也認同文學是思想的藝術化、形象化，但還是特別強調優秀的藝術並不單單取決於形象，在這之前更具決定性的是**內容與思想意識**。

另一方面，德永直在討論「藝術大眾化」問題時，顯然相當在意貴司山治「**藝術文學有其本來自身形成的目的，為此必然無法妥協於教養程度低的大眾之理解範圍**」這類的思考方式與發言。德永直認為在現實生活裡，一個文學作品的大眾化程度，往往取決於各種政治的、經濟的理由與制約，然而「**卑俗的大眾化論**」、「**大眾化否定論**」卻常常忽略這些政經因素，而對大眾的「**藝術理解能力**」產生不信任感。他認為在這種文學觀底下所說的「**文學**」，並非大眾的文學，而僅僅是資產階級的個人主義文學。

勞動者出身的德永直回憶幼少時，常常在夜裡被不識字的鄰居們包圍著要求朗讀講談本的經驗，以及印象中工廠的機器上、角落裡常見的些許點綴，勞動者在有限的生活條件裡，一直在試圖追求可能的藝術經驗，然而政治經濟條件的限制，讓勞動者幾千年來無法，也不被允許擁有「**自己的藝術**」。²¹

基於這樣的經驗與認識，德永直對於藝術大眾化的基本態度是，**普羅大眾擁有充分的能力，理解與自身生活關係密切的文學作品，因此普羅文學的藝術化程度愈高，其大眾化的可能性也愈高**。而如何創作大眾會感興趣的文學？德永直提出「**主題的積極性**」，也就是作家應該試著探究大眾最關心、最切身、最能左右其生活的關鍵，為此作家必須走入大眾的生活並在那當中學習。他認為所謂「**文學技術**」的問題，必須與「**主題的積極性**」放在同樣的高度來討論。²²德永直在這裡所談的「**藝術化**」，並非向來被狹義化的「**藝術性**」（亦即大多時候被拘限在布爾喬亞的個人主義式的美學觀、文學技術的「**藝術性**」），而是必須同時考慮**文學技術**（包含布爾喬亞式的美學傳統與普羅文學面向大眾的表現方法），加上**具備思想、感情、生活的要素，以及主題的積極性**。德永直認為，這樣的「**藝術化**」必能帶來「**大眾化**」的實現。

然而在商業主義的大眾社會已然形成的 1935 年前後的日本社會，所謂「**大眾會感興趣的文學**」，除了主題是否關係切身問題之外，事實上還有另一個決定因素、同時也是普羅文學向來容易被質問的「**趣味性**」問題。對此德永直也將「**趣味性**」予以問題化，他認為「**趣味性**」有兩種：一種是一般所說的「**有趣、好玩**」，往往伴隨著「**忘卻己身煩惱**」、「**暫時遠離生活痛苦**」這類逃避性的意識型態；另一種則是來自追求生活向上、往前邁進之欲求的「**有趣**」，德永直認為文學作品應該提供的應該是這種進步的趣味性。²³

對於德永直的批評，貴司山治同樣在《文學評論》雜誌裡陸續發表了〈文學大眾化問題的再三提起——駁德永君之二三見解〉²⁴、〈藝術內的藝術大眾化論〉²⁵、

²¹ 德永直，〈小說學習（二）〉，《文學評論》2：5，1935年5月，頁137。

²² 德永直，〈小說學習（二）〉，《文學評論》2：5，1935年5月，頁141～145。

²³ 德永直，〈小說學習（四）〉，《文學評論》2：8，1935年7月，頁148。

²⁴ 貴司山治，〈文學大眾化問題的再三提起——駁德永君之二三見解〉，《文學評論》，2：9，1935年8月。

〈藝術外的藝術大眾化論〉²⁶予以反駁並重申自己的主張。

貴司山治強調大眾化的問題必須放在現實的社會條件中思考。他認為向來的普羅文學所談的「藝術立腳於高度的思想意識的話，便能具備大眾性」這類的文學基本方針，抽象來說並沒有錯，然而這種原則卻無法解釋「低等思想意識的文學在現代社會裡如壓倒的洪水般氾濫」這樣的事實。相較於向來普羅文學這種試圖打破「高級文學／大眾文學」而提出的一元論原則，貴司山治選擇承認現實中存在的二元構造，他對於藝術的基本把握是：藝術文學有其本來自己形成的目的，其必然不能妥協於（某時代的某民族的某種階級的政治條件下的）人民的文化發達程度，藝術所追求的是獨自的形象化的完成。²⁷而向來普羅文學的基本方針，卻總是把藝術性、大眾性的問題同時歸結在「文學」、「藝術」問題內，其結果必然產生矛盾。

貴司山治認為無論是藝術性或大眾性，都與作者的思想意識無關，藝術的藝術性與大眾性的實現，關鍵都在於「形象性」的完成，也就是文字的表現、描寫。針對德永直所說的：普羅文學若能描寫普羅階級在現實中面對的切身問題，無論是多麼高度的問題大眾都能理解。對此貴司山治認為，很多問題的理解必須經過複雜的思維，然而勞動者被束縛於苛酷的勞動條件裡，往往沒有提高自身文化教養的余裕，因此意識層面的生活未臻成熟，普遍表現出「思考是麻煩的」這樣的性格。然而勞動者的直覺、感覺、感情卻是充足的，因此若能善用「感覺的方法」，或許較之「思惟的方法」，更能讓勞動者容易理解問題的核心。這是音樂、電影、演劇較之文學更能進入勞動者生活的原因之一。而所謂「感覺的方法」，同樣必須藉由文字所達成的形象化予以實現，也就是適應大眾文化條件的描寫、敘述與說明。貴司山治指出，這種形象化與普羅文學作家過去曾經主張過的「表現的單純化」不同，他以小林多喜二為例，其小說〈組織者〉（「オルグ」）即依循 1930 年〈關於藝術大眾化的決議〉²⁸中所決定的基本方針，以更「單純明快」的表現方式所寫成的作品，然而其感銘力及形象的豐富性卻遠不如小林更早之前的作品如〈蟹工船〉、〈不在地主〉等。貴司山治認為「表現的單純化」畢竟不是文學大眾化的解決之道。²⁹

貴司山治指出普羅文學無法像大眾雜誌《國王》一樣普及，是因為它並不像這些大眾雜誌一樣能獲得來自階級的政治的保護，並藉由這些力量出版、發行，不具備這種能予以大眾化保證的機構，是普羅文學的「社會的限度」。貴司山治提出的對策是，為了藝術大眾化，必須提供提升大眾教養的社會性手段。他呼籲良心的進步文學者，在創作健實的藝術文學的同時，應該投入提升大眾教養的「藝

²⁵ 貴司山治，〈藝術內的藝術大眾化論〉，《文學評論》2：10，1935年9月。

²⁶ 貴司山治，〈藝術外的藝術大眾化論——文學大眾化論的再三提倡（3）〉，《文學評論》2：13，1935年12月。

²⁷ 貴司山治，〈藝術外的藝術大眾化論——文學大眾化論的再三提倡（3）〉，《文學評論》2：13，1935年12月。

²⁸ 1930年4月6日普羅列塔利亞作家同盟中央委員會在第二回大會時所決定的基本方針，〈關於藝術大眾化的決議〉一文則發表於1930年7月的《戰旗》雜誌。

²⁹ 貴司山治，〈藝術內的藝術大眾化論〉，《文學評論》2：10，1935年9月。

術外的」社會教育工作。他認為藝術創作與啓蒙工作是必須區分的二個戰線，而所謂的「實錄文學」，所要創作的便是作為教育手段的「啓蒙讀物」。³⁰

根據貴司山治的說法，實錄文學很清楚地是鎖定在對抗「卑俗低級的大眾文學」，而試圖創作一種「更健全的通俗文學」。實錄文學主要是以小說的形式創作，並非事實的記錄，由參與實錄文學研究會的人以及他們的作品來看，「實錄文學」很大的偏向是針對大眾文學當中的「歷史小說」，也因此他們特別強調要排除虛偽的、捏造的歷史，追索歷史的真實，並以現代的詮釋方式予以創作適合大眾的讀本。³¹

可以看到的是，文學大眾化的論爭裡，二元論可以說一直都是觸動普羅文學作家敏感神經的一個問題。談及這些論爭，而對於貴司山治的主張表示理解的作家或評論者，多會針對歷來的普羅文學運動指出一個問題：普羅文學作家對於文學大眾化的問題往往只是重複著過去以來的的方法論，而別無法他法。³²特別是在大眾社會已然形成的 1930 年代的日本，普羅文學團體基本上對於大眾機構的積極利用持否定態度，儘管堅持著具理想性的原則論，實際上改變現實狀況的力量卻很有限。而這種決絕的精神主義，可能也是普羅文學在日本社會漸被孤立化的遠因之一。³³

不過值得注意的是，尾崎秀樹在〈貴司山治論〉中曾提到，貴司山治踏入文學界的過程與其他普羅文學作家的路徑相當不同，貴司山治早期先是投稿大阪時事新報的懸賞長篇小說時獲得三等，由此機緣進入時事新報成為記者並從事創作，往後持續在報紙、雜誌（主要是講談社的《富士》、《講談俱樂部》）裡執筆新聞小說、戀愛小說、電影小說。與同時期普羅文學運動脈絡裡的普羅列塔利亞作家同盟的作家相較之下，貴司山治的經歷顯然較為特殊，在實際參與勞動運動的同時，他的創作據點幾乎都在大眾媒體，這促使他在思考普羅小說或理論時，特別著力在「大眾性的形式」。³⁴由此經歷來看，對於尾崎秀樹接下來提到的，「實錄文學」作為貴司山治的「普羅大眾文學」的一種實踐，事實上由其往後的創作來看，當中的「普羅」文學的成分已逐漸稀薄這樣的傾向性，似乎也不是太令人意外的結果。

此外在這場論爭裡，貴司山治與德永直各自問題化的東西也是有差異的，貴司山治著眼處在於日本已然形成的大眾社會，他所針對的是被法西斯利用的大眾文學，加上他曾從事大眾文學寫作的經歷，讓他選擇了一種進出大眾文學的方式，以所謂具大眾性的「感覺的方法」創作的「啓蒙讀物」，亦即他所提倡的「實錄文學」，作為在大眾社會中爭奪大眾、實現「大眾化」的工具，但由其往後的創作傾向，以及《實錄文學》雜誌的軟性化來看，在某種意義上似乎也可以說貴

³⁰ 貴司山治，〈藝術外的藝術大眾化論——文學大眾化論的再三提倡（3）〉，《文學評論》2：13，1935年12月。

³¹ 貴司山治，〈藝術外的藝術大眾化論〉，《文學評論》2：13，1935年12月。片岡貢，〈實錄文學研究會的人〉，《文學案內》，1：4，1935年10月。

³² 片岡貢，〈實錄文學研究會的人〉，《文學案內》1：4，1935年10月。

³³ 此為森山重雄的說法。引自尾崎秀樹，《大眾文學論》，東京：勁草書房，1965年初版，1979年第五刷。頁132。

³⁴ 尾崎秀樹，《大眾文學論》，東京：勁草書房，1965年初版，1979年第五刷。頁129。

司山治的文學已逐漸背離普羅文學。而德永直所針對的，是 1935 年前後日本社會整體，特別在文學領域的「去政治化」趨勢，在一片追求「一般性藝術」的回歸聲當中，普羅文學的藝術成就逐漸被壓抑或被淡忘，在文壇上充斥著的所謂「文學性」、「藝術性」等內涵再度保守化、高蹈化。另一方面運動組織的瓦解、勞動時間的延長、工廠內的間諜制度、文化反動設施等，顯示著勞動者的處境更為艱難，在此低迷的社會氣氛下，德永直呼籲更具積極意義的趣味性的普羅文學，反對在二元論的文學觀下導致的二極化發展的高級文學與大眾文學。這是德永直與貴司山治在這場論爭裡主要的論點。

如果從這場論爭的內容來看，挪用貴司山治說法的劉捷，他所說的「藝術不是大眾的」，可能包含的內容是：1、「藝術文學有其本來自己形成的目的，其必然不能妥協於人民的文化發達程度，藝術所追求的是獨自的形象化的完成。」在此「藝術」的意涵並沒有被問題化，而是沿用社會普遍的、既定的對「藝術」的認知與定義。此外依據楊達的引用，劉捷的說法可能是「以往的文學是知識份子的，所以說『藝術是大眾的』是騙人的」，因此可以推測劉捷的說法，可能有一部份是陳述他所認識的一種歷史「事實」。他可能是就這點歷史「事實」，否認楊達所說的「藝術是大眾的」。2、基於承認文學的「上／下」結構，而將「藝術創作」與「大眾啓蒙」視為兩個必須有所區別的事。儘管誠如德永直的批判，這種前提式存在的二元觀點，是既存的資產階級的價值觀。它其實可以逐步被論證到與「為藝術而藝術」、「藝術至上論」具有相同的結構、價值取向與偏見，以及在這個歷史點上趨向法西斯主義。然而我想多談談的是，在這個推論之前，劉捷的文學觀的面貌是否可能還有更細部的討論與呈現。他與當時同樣對「藝術是大眾的」不表贊同，其言論在當時，抑或目前的前行研究裡，也被認為傾向「藝術神秘化」的吳天賞、陳永邦、李張瑞、新垣宏一等人的評論文字，如何區分，以及如何進行比較分析，也是本文接下來想試著探討的一個重點。

四、啓蒙主義立場

在「文藝大眾化」這個議題上有兩個重點，一個是關於「大眾」的討論；一個是關於「文學」、「藝術」的討論。前者是作家怎麼思考「大眾化」、「大眾」指的是什麼，而它們最後必定會牽涉到作家「看待大眾的態度」，由此導出了過去在碩論裡論證的關於劉捷的「啓蒙主義立場」。然而過去在碩論裡的討論方式，大抵是沿著楊達對劉捷的批判，去重構劉捷對文藝大眾化的思考。同樣也討論到這場論爭的先行研究，還有趙勳達的《《台灣新文學》(1935~1937)的定位及其抵殖民精神研究》，及其博士論文《「文藝大眾化」的三線糾葛：一九三〇年代台灣左、右翼知識份子與新傳統主義者的文化思維與角力》，他在這兩部論文裡，對於劉捷的文學觀也有不少討論，特別是後者，然而其重點主要放在論證劉捷的文學觀不符合左翼理論，實際上應將他放回右翼的文化立場。或許我們的討論方式很不同，然而其實都在論證劉捷的反動性質。但在這裡我卻想再重新追溯一次，也許基於想還原更多劉捷文學觀的「內容」，而不僅僅是確認他的「不左」，

同時藉由對其文學觀的討論，我認為或許可以觀察到這個時期台灣文學界裡，所謂「資產階級藝術觀」在文化運動裡的適應，以及文藝評論的「職業化」。

劉捷這篇發表於論爭中的〈何謂文藝上的大眾〉，應該是最能直接呈現他對文藝大眾化思考的文字，在這篇文章已經散佚的情況下，我想嘗試看看是否能夠以劉捷本人的評論文字，重構他對文藝大眾化的想法。事實上在劉捷的目前所能看到的評論裡，儘管文學的社會性不時被強調，但探討「文藝大眾化」的東西其實不多。在文學實踐方面，劉捷更常強調以知識階級的力量，去指導、創造、整頓。例如在可能是劉捷寫於台灣文藝聯盟結成前後的〈新文學運動的批判〉裡，他提到：

我講過，台灣文藝聯盟結成的社會意義是因現在的青年與現在的社會沒有共感，為了逃避於新的自由天地做再出發。但如更正確地講時，那不止是單純地逃避；不，勿寧可說是做時代先驅者前進，扮演著指導者的角色——或可說是想扮演。這正確地理解藝術的時候，能以有道理而受肯定。文學在任何時代，恆為青年之友。文學在沈滯的時代，也在社會的革命將要飛躍的時期，恆與青年緊握著手的就是文學。就富有感性的青年而言文學既不是職業，又不是專門技術；那是可同時為宗教、為道德、為政治；不，應該是人生整體。³⁵

劉捷的想法雖然具有一定的積極性，但事實上就時代議題與言論的發展來說，在文學的思想性上，同時強調文學與人生、文學與社會的關係；進而在文學的社會性上，同時強調以文學認識社會，以及以文學介入社會；然而在介入社會改革的力量方面，劉捷似乎更常把重點放在「知識人的力量」。與經歷過社會運動、階級運動洗禮過、普遍強調「大眾的力量」的言論相較之下，這個時間點的劉捷的思考，反而有後退於時代的傾向。

雖然從劉捷的評論來看，並非完全找不到考慮「大眾」或關於「大眾化」的文字，但其密度其實不高。劉捷在這個議題上的發言，目前可以整理出來的比較直接相關的文字有兩筆，其一是 1934 年 12 月 23 日台灣文藝聯盟的參與者在台北舉行的「北部同好者座談會」，在會議進行到「大眾化問題」的討論時，身為該座談會主持人的劉捷是這麼發問的：

由於這個問題過於廣泛，所以我們好像有必要將此局限，而祇談如何使大眾理解我們的藝術或文學，使之成為與日常生活有關的趣味性的東西，也就是如何使文藝大眾化這一點上才對。³⁶

³⁵ 劉捷，〈新文學運動的批判〉，收錄於《台灣文化展望》，1936年2月出版，遭禁。劉捷著，林曙光譯註，《台灣文化展望》，高雄：春暉，1994年1月。頁280~281。

³⁶ 〈《台灣文藝》北部同好者座談會〉，座談會時間為1934年12月23日，文字稿原刊於《台灣文藝》2：2，1935年2月1日。收錄於陳芳明等編《張深切全集·卷11》，台北：文經，1998年。頁149~150。

另外一筆則是 1936 年 6 月台灣文藝聯盟在東京支部舉辦的座談會，這時楊逵與劉捷的論爭已經暫告一段落。在這場座談會裡，同樣討論到「大眾化與水準的關係」，而同樣也身為主持人的劉捷這麼發問：「也就是說，爲了要我們的文學健全的發展，必須要考慮讀者對象，因此，我認爲大眾化的問題也該提出來當做議論的題目。」回應這個問題的，首先是《台灣文藝》的編輯者張星建，他認爲文學的大眾化並非意味「降低水準」，即使提高台灣文藝的水準，也還有大眾化的途徑。緊接著是吳天賞的回應：「千萬不可降低水準，大眾化不是作家的任務，而是政治家和教育家的任務」。事實上這段期間吳天賞的純藝術論傾向發言受到許多台灣作家的批評。³⁷劉捷對此意見也不表贊同，他回應：「不一定這樣，作家對大眾化有所理解，儘可能取材於台灣，以簡潔的文章寫出令台灣讀者易懂的作品才重要呢。」³⁸

此外，還有一篇應該納進來一起討論的文章是〈關於台灣的啓蒙運動〉，這也是劉捷的評論裡少數涉及到大眾啓蒙議題的文章。文中劉捷談到：

…一提啓蒙，世上所謂有教養的人，對此有興趣的人，每受人蔑視，堪說是嚴重地錯解。大正八、九年間有過啓蒙運動，才能有今日的台灣文化，自今以後的啓蒙，適為新的明日文化的基礎。今日的急務應在掃除文盲，但這不待教育的普及是難於做到。又如果全民都是識字，也不見得啓蒙已完成了。

啓蒙的真義乃接受大眾自然成長的意識，使其導向正確的方向，即使成具有目的意識。在政治的啓蒙，使領悟政治的本質；在打破迷信，應使領悟迷信的不合理，非導向合理的方向不可。因此，應造成多有機會接觸大眾。³⁹

至於具體的行動，劉捷認爲，如果想啓蒙大眾，必須理解大眾並保持和他們的接觸。因此：

啓蒙運動應在各團體、聚落、工廠等集團中辦理才是捷徑。又各團體當主辦而活動是最有績效的。（中略）如果各種親睦機關、教化團體奮起，發

³⁷ 例如呂赫若在〈舊又新的事物〉中批評吳天賞曾說過的「我們沒有必要說文學上的社會性與階級性如何又如何。這是次要的問題，即使不存在於文學中亦可。」呂赫若批評此爲理論落後，重申反對藝術的超社會性，同時強調藝術若脫離階級的利害是無法存在的，也無法有所發展。原刊《台灣文藝》3：7、8號，1936年8月。林至潔譯，收錄於《呂赫若小說全集》，台北：聯合文學出版社，1995年。頁555～556。此外吳新榮也寫過一篇〈致吳天賞〉，同樣批評吳天賞文學觀的無思想性與非社會性。吳新榮的文章原刊於《台灣新聞》文藝欄，1935年，月日不詳。張良澤譯，收錄於呂興昌總編輯《吳新榮選集一》，台南縣文化局，1997年。頁402～403。

³⁸ 〈台灣文學當前的諸問題——文聯東京支部座談會〉，會議時間爲1936年6月7日，文字稿原刊於《台灣文藝》3：7、8號合刊，1936年8月。陳藻香譯，收錄於陳藻香、許俊雅編譯《翁鬧作品選集》，彰化縣立文化中心，1997年。頁227～228。

³⁹ 劉捷，〈關於台灣的啓蒙運動〉，就這篇文章的內容推測，成文時間應爲1935年11月之後。收錄於《台灣文化展望》，1936年2月出版，遭禁。劉捷著，林曙光譯註，《台灣文化展望》，高雄：春暉，1994年1月。頁200～201。

動大眾啟蒙運動，這就台灣的明朗化以及文化台灣的建設上是最值得期待的；尤其這是對知識份子、社會運動家、留學生最適合的工作，願這些人發揮以一人應付眾人的熱情。

這是目前劉捷的評論文字裡，少數直接碰觸到「文藝大眾化」或「大眾啟蒙」議題的文字，而在這些發言裡，可以整理出劉捷對這些問題的認識與思考是：1、所謂的文藝大眾化指的是：怎麼讓大眾理解「我們的藝術或文學」；2、作家可以做的是：取材於台灣，以及以簡潔易懂的文字寫作。3、儘管劉捷談到在其他文化建設、大眾啟蒙運動方面，需要各團體所舉辦的活動，而這些工作是知識階級的責任。但談及「掃除文盲」，這個實際上與文學大眾化密切相關，同時也涉及到知識份子設定的「讀者對象」的問題時，劉捷的想法是，這個問題的解決「不待教育的普及是難於做到」。

張深切曾在 1935 年發表的〈《台灣文藝》的使命〉中討論當時台灣的識字階層時，引用過一段數據：

具某方面的調查——台灣的識字階級約有全人口之四〇%，約有二百萬，就中能夠閱讀三國演義程度的最少還有全人口之百分之一，即約有五萬，而在台灣所發行報紙，某報的購讀部數，約有二萬餘部，台灣的文化標準雖然還低，而統計全島讀報階級卻約有十餘萬，審諸事實，咱們應該還剩有充分發展餘地，…

如果參考這裡的數據，1935 年前後的台灣，「非識字階層」約莫有全人口的 60%，張深切在該文中主張，台灣作家「最要緊的還是要把大眾為對象，來完成咱們的啟蒙工作，這樣做去，所謂文藝大眾化纔能達到目的」。然而他也在該文裡明確地指出：

其實文藝大眾化並不是謂文藝要普遍到一般文盲階級去的意思，察其用意是祇要獲得比較普遍化的程度而已，不然各派斷不能夠獲得文盲階級去鑑賞他們的藝術呢。⁴⁰

張深切與劉捷的思考或許未必全然相同，然而如果回頭再次整理劉捷的評論文字，所謂「文盲階級」，事實上也不是在他考慮「文藝大眾化」，特別是「文學大眾化」的「讀者對象」範圍內。他所呼籲的知識階層的責任範圍，或許還包含可以透過辦活動進行文化啟蒙工作，然而對於「非識字階層」的識字教育或啟蒙工作的消極態度上可以推測，劉捷在談文藝大眾化時，其所謂的「讀者對象」、「大眾」，其範圍並不包含占全人口 60% 的非識字階層。這一點與張深切的想法可能很接近，認為文藝大眾化並不是要「普遍到一般文盲階級」，而只是要「獲得比較普遍化的程度」而已。

⁴⁰ 張深切，〈《台灣文藝》的使命〉，《台灣文藝》2：5，1935 年 5 月 5 日。

劉捷針對楊逵強調的「藝術是大眾的」這樣的說法予以否定並提出批評，楊逵在〈台灣文壇近況〉裡提到：「（劉捷）說我忽略大眾的階級性，一口咬定從標題就可以看出楊逵的粗糙，攻擊我沒有把大眾區分成『普羅大眾』和『遊食大眾』（中產階級大眾）」。⁴¹在這裡可以得知劉捷認為「大眾」必須區分為「普羅大眾」、「遊食大眾」，這也是他何以說「（大眾化的問題）令人困擾的是對「大眾」二字的解釋頗紛歧，對大眾的基本認識尚未形成，因此對大眾化的認知可謂百人百樣了」。⁴²如果以 1935 年台灣的階級結構，以及前面討論過的劉捷的評論文字來看，劉捷的「遊食者大眾」（中產階級大眾）與「普羅大眾」在當時的台灣社會裡，實際上對應的很可能分別是「識字階層」與「非識字階層」。他之所以說「藝術不是大眾的」，或許是因為基於現實上的閱讀人口與文學對象，文學並非屬於未經區分的這個「大眾」範圍內的所有人。

在劉捷的文學實踐裡的確可以觀察到類似貴司山治的思考模式，劉捷在談文學、藝術時，也是基於承認「上／下」結構，而將「藝術創作」與「大眾啓蒙」視為兩個必須有所區別的事。這種承認「上／下」結構的文學觀，基本上還是預設了大眾的教養與文化等級，也預設了知識份子與大眾的等級關係（而非相對關係）。然而不同於貴司山治對「藝術創作」與「大眾啓蒙」雙頭並進的企圖，劉捷本來談論「大眾化」、「大眾啓蒙」的東西就不多，較多的還是知識份子怎麼研究、創作文學。從這點來看，劉捷對於「大眾啓蒙」其實不能說是積極的。和楊逵、德永直、貴司山治這些曾經實際參與社會運動的作家相比，劉捷的文學活動雖然也是在文化運動的脈絡內進行，但其文學實踐卻始終少了某種運動性格。

五、「高級的藝術觀」

游勝冠在〈「轉向」及藝術派反動的純文學論——法西斯主義氣焰高漲中的文聯路線之爭〉中，曾以張深切為例，論及 1930 年到 1937 年所形成的一股文學反動勢力，他認為在這個時期可以觀察到的是知識份子政治立場的極右化、文學立場的轉趨保守，出現主張不涉政治、為藝術而藝術的純文學論的「轉向」。⁴³我也認為這個「去政治化」的趨勢是存在的。不過我認為台灣文壇 1930 年代的純文學論的膨脹，除了政治運動遭到當局鎮壓之後，言論尺度的緊縮與知識份子的思想、實踐路線的轉變，產生的不涉政治的走向之外，與此密切相關、但我認為也有必要進一步區辨的另一個動向，是新文學發展到這個階段時，所謂文學「本格化」的追求，這個部分有待另文討論，但是與此動向有關的，是作家們對於「文學是什麼？」的思索，而這也是在德永直與貴司山治的論爭，或在楊逵與劉捷的

⁴¹ 楊逵，〈台灣文壇近況〉，原刊《文學評論》2：12，1935 年 11 月。涂翠花譯。收錄在《楊逵全集·第九卷·詩文卷（上）》，台南：國立文化資產保存研究中心籌備處，2001 年，頁 409～415。

⁴² 〈台灣文學當前的諸問題——文聯東京支部座談會〉，會議時間為 1936 年 6 月 7 日，文字稿原刊於《台灣文藝》3：7、8 號合刊，1936 年 8 月。陳藻香譯，收錄於陳藻香、許俊雅編譯《翁鬧作品選集》，彰化縣立文化中心，1997 年。頁 227～228。

⁴³ 游勝冠，〈「轉向」及藝術派反動的純文學論——法西斯主義氣焰高漲中的文聯路線之爭〉，2010 年台灣研究國際研討會：日治時期台灣研究——文化移譯與殖民地現代性，2010 年 6 月 4 日、5 日，加州大學。

論爭裡，當他們試圖檢討所謂的「資產階級的藝術觀」時總會帶出的問題。我認為這兩場論爭的構造有其類似之處，是因為楊逵對於劉捷論點的不滿，其中一個原因也在於楊逵向來對於「高級的藝術觀」是敏感的、批判的。楊逵與劉捷的論爭，除了可以觀察到他們怎麼思考知識份子與大眾的關係，特別是他們「看待大眾的態度」、對「大眾」的定義之外，事實上也能透過他們的論爭，觀察這時期台灣知識份子對於「文學」、「藝術」的定義。

劉捷所說的「藝術不是大眾的」，儘管可能同樣基於所謂「資產階級的藝術觀」，但其思考內容恐怕不能單純被視為只是「為藝術而藝術」、把「藝術神秘化」。在他的評論文字裡，甚至還可以看到對於這類藝術至上論的批評：

我反對使藝術神秘化從生活游離的解釋。今日在這島上，所謂有識之士，不知藝術為何物且視藝術為奢侈品。又在從事藝術的工作的人員，不少人卻帶著自為神秘的態度不疑，從現實移走眼睛。藝術至上主義者等的主張，大致雖有道理，卻因多含不可知的觀念，只有更遠離生活。其中有人，因做擬似空想的浪漫蒂克的言行，被指責為無關社會生產的平凡「文學青年」。不只文學青年，一般對藝術的觀念要使它神秘化的藝術家應受輕蔑。

44

以及在談論文學的功利性質與審美性質時，劉捷也有這樣的思考：

文學和政治、道德一樣，只有勸人為善或功利主義的功用嗎？我想，受過近代教育的人可能有更進一步的想法。一開始，也許的確是政治家為了瞭解民意，或刺激政績而利用小說和詩之類的文學，但文學並不是只有這種目的。它有功利的一面，同時也有審美的一面。雖然那種玩票性的審美觀、移情作用說和藝術性的審美觀，都各有各的道理，但目前還是這種統一的藝術觀最妥當，不會出問題。⁴⁵

這個部分劉捷其實是想從在台灣流行的中國通俗小說談所謂的「東洋式的文學觀」，他認為這些小說的藝術出發點「已經站在功利式的藝術觀上，向真理一面倒，所以總是被視為政治和道德的附屬品。藝術或文學的自律性的進步發展停滯不前，如今可以說已經跟不上時代，完全喪失了它的思想性」。如果對劉捷的說法稍加分析，其實可以辨明的是，劉捷所談的「功利性」與「審美性」的「統一的藝術觀」，可能只是一種「修辭」。他真正的想法，可以從他在這裡批評所謂「東洋式的文學觀」時，針對其實不是這些「勸善懲惡」式的「真理」或舊道德，在現代社會的不適用性，他的談法，其實還是指向這些文學「總是被視為政治和道

⁴⁴ 郭天留（劉捷），〈有關台灣文學的備忘錄〉，原刊於《台灣文藝》2：5，1935年5月。林曙光譯。收錄於黃英哲主編，《日治時期台灣文藝評論集·雜誌篇·第一冊》，台南：國家台灣文學館籌備處，2006年。頁238。

⁴⁵ 劉捷，〈台灣文學的史學考察（一）〉，原刊於《台灣時報》198，1936年5月。涂翠花譯。收錄於黃英哲主編，《日治時期台灣文藝評論集·雜誌篇·第二冊》，台南：國家台灣文學館籌備處，2006年。頁10。

德的附屬品」、「藝術或文學的自律性的進步發展停滯不前」的問題，事實上他所認知的文學、藝術，雖然也包含世界觀的思想性、指導社會的「功利性」，但更重要更關鍵的，其實還是所謂「藝術的自律性」。

這可能也是劉捷何以會說「藝術不是大眾的」的原因之一。以楊逵向來對於所謂「資產階級藝術觀」、「高級的藝術觀」的敏感與批判，他雖沒有直接譴責劉捷事實上也是「將藝術神秘化」，但他很清楚劉捷所說的「藝術」，事實上也是意涵並沒有被問題化，而只是沿用社會普遍的、既定的對「藝術」的認知，也就是「藝術有其本來自己形成的目的」這類的藝術觀。然而楊逵選擇的還是把這種「藝術」、「文學」問題化，他認為「大眾不瞭解現在的雜誌文學，卻不能因此說文學不是大眾的，也不能說大眾不懂文學」。在這裡楊逵所說的其實不是既定意涵的「文學」。他認為：

大眾的文學當然不像今天這樣的文學，大眾還是有大眾的文學。現在的文壇文學、給文學專家讀的文學，我覺得都不是真正的文學，應該稱為文學的行屍走肉。台灣的人們渴求真正的文學，而不是文學的屍骸；作家們也多半是為了真正的文學，而不是為了文壇的文學而奮鬥。⁴⁶

我認為這種是否將既有的「藝術」、「文學」的意涵問題化，是德永直與貴司山治，以及楊逵與劉捷的這兩場論爭裡，一個很類似的關鍵點。就這點來說，無關乎劉捷與楊逵實際上與日本的《文學評論》或《文學案內》的聯絡關係如何，應該都不能將他們輕易歸類，或藉此詮釋他們的傾向。由於這種基本價值觀的差異，我認為把「藝術」、「文學」問題化的德永直與楊逵，關注的問題其實是比較接近的。而選擇在「既定現實」上討論文學問題的貴司山治與劉捷，確實在價值取向上有其類似之處。因此就這方面來說，對於垂水千惠曾在〈楊逵所受之左翼思想及其主體性——自社會主義 realism 至普羅大眾文學的回溯〉⁴⁷裡分析楊逵有從接近德永直到接近貴司山治這樣微妙的轉變，如果這裡意味的只是文學活動上的聯絡，以及對於《文學評論》或《文學案內》的看法，或許還可以說得通，然而如果這裡也意味著思想上的變化，那麼我認為可能是需要再斟酌的。

六、結論

關於「藝術不是大眾的」這個部分的分析，結果似乎也只不過將先行研究已然歸納好的東西，抽絲剝繭開來，又組織了回去，得到的結論是，這些對文藝大眾化抱持消極或否定態度的作家，其實具有構造相似的「高級的藝術觀」。但對

⁴⁶楊逵，〈台灣文壇近況〉，《文學評論》2：12，1935年11月。涂翠花譯，收於彭小妍主編，《楊逵全集·第九卷·詩文卷（上）》，國立文化資產保存研究中心籌備處，2001年12月。頁414~415。

⁴⁷垂水千惠〈楊逵所受之左翼思想及其主體性——自社會主義 realism 至普羅大眾文學的回溯〉，收錄於垂水千惠《1930年代台灣文學における日本プロレタリア文学の影響》研究成果報告書，2005年3月。

我而言，問題意識來自於這些主張「藝術不是大眾的」的評論文字，特別當它們是出自於文化運動陣營中的作家之手時，這些看似再明白不過的反動主張，可能具備了一些似是而非的性質，需要辯證地處理與再探討，而這些討論，或許能夠在前行研究的基礎上，多少再追蹤出一些戰前台灣作家在文藝理論與文學路線思考上的複雜性。